

俳句雜誌

令和三年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四卷第七号

水 明

2021 7月号



《今月のかな女》

噴水の高きに揺れぬ萬國旗

(句集「龍膽」)

長谷川かな女

噴水と万国旗の言葉から想像して、その場所は公園ではないかと思う。吹き上げる噴水の高さにひらひらと揺れ動く万国旗を眼に描くと、嘗ての運動会の光景が還ってくる。大正十四年の作とある本句であるが、当時大きな催しがあった会場の様子であろう。国の数は幾つであったろう。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

膝並べ調弦を待つ夏座敷

波多野寿子

琴の合奏の前の光景である。先ず会場の座敷の畳と簾が目に飛び込んでくる。奏者の出す音を揃えるために、最も音感の秀でた者が、調弦の役を受け持って、一人一人の音を揃えてゆく。全員正座して自分の番を待つ緊張の時間。静まりかえった空気を裂く調弦の音。永年琴を能くした作者ならではの臨場感あふれる作品である。

(鬼之介・推薦)

水明

令和3年
7月号

華の一句

瓦斯燈 (作品)

山本鬼之介

4

葉桜 (近詠)

菊池ひろこ

6

落し文 (近詠)

鈴木康世

7

冠木門 主宰作品の鑑賞

境延昭

8

硯箱 季音月評

井口俊晴

10

季音「雪」 (同人作品)

波多野寿子 星野和葉
茂木和子 ほか

12

季音「月」 (同人作品)

原田想子 森本早苗
丸山マスマミ ほか

19

季音「花」 (同人作品)

近徹徹平 井上玲子
正木萬蝶 ほか

24

『水明誌』を繙く

大石雄鬼

29

現代俳句鑑賞

網野月を

30

俳誌望見

梅澤佐江

44

瓦斯燈

山本鬼之介

びん札を抜き出す指よ風薫る

緋目高を枯淡の甕が迎へたり

朝ぐもりより五日目に剃るひげの音

葉柳やむかし銀座に点灯夫

嫂へ京は老舗の葛桜

「おいしい」を目で言ふをんな夏暖簾

二次会の席へ螢の舞ふ小径

月の姫招くかたち
に今年竹

葉 桜

菊 池 ひろこ

曲水の一巡すれば囀れり
葉桜や詩の後半を読み返す
青嵐中間色のままの父母
郭公や井戸端会議の武家屋敷
夏至の夜の禿山フェイス・シールドら
夏近しバベルの塔へ外階段
寝付かむとすれど水面へ夏落葉

旧約聖書中に「バベルの塔」の話がある。人間が天に達する高塔を建てようとしたことを神が怒り、人間の言葉を互に通じないようにしたため、工事は中止された、という。現代では自動翻訳機があるが、外国人労働者の環境は劣悪のようだ。夏には必要な場所に外階段等を！東京オリンピック・パラリンピックも、会場の準備に費やされた費用や人力があった。開催の良し悪しは？筆者の発想の飛躍をお許しいただきたい。

落し文

鈴木康世

海芋白し花の奥なる翅の音
石楠花やしきりに動く手話の指
丁寧は今を生きたし鉄線花
葉桜や細身となりし円空仏
足を止め茅花流しに身を任す
踏み惑ふ杖のその先青芒
お喋りは暫しお休み落し文

葉桜の緑が美しい。人通りの少ない時間に杖を友に散歩に出る。どの家からも沢山の花の咲くのが見え足を止め見とれる事が多い。小さな庭にも季節の花が育てられ通りすがりの目を楽しませてくれる。
読書には知・好・楽が大切と話す人が居るが、散歩にも当て嵌まる様だ。知り好きになり楽しめる散歩にしたいとリハビリの頼りの杖との歩で思う今である。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

四月号

霧や月琴飾るシヨーカーズ

幕末の志士坂本龍馬が妻おりようは月琴を奏すと郷里土佐の姉へ書き送っている。胴が満月の様に丸いことが月琴の名の由来である。棹にはギター同様に音階のための横桁、フレットがあり三味線よりは奏し易いのかも知れない。この号のタイトル「義甲」は奏するための琴爪、ピックのことである。正倉院宝物にもあり日本への伝来は古い。季語「霾」から察するに月琴は古代文明発祥の黄河流域に起源するのだろう。博物館の陳列棚にある景と読む。

浄瑠璃の艶物のあと春の雨

艶物は義太夫では男女の愛とりわけ情事についての語り、芝居や映画で言う濡れ場である。同じことでも語感、情感が違ふ。聴覚と視覚の違いもあり濡れ場ではリアルでどぎつぎざる。そのものには疎いが、この句にはしっとりした大人の情感がある。

都をどりのポスター街にお中日

三月号に祇園甲部の夕景色の句があつた。謂わばその続編と言ふべきか。彼岸の中日ともなれば、都踊りを数日後に控え祇園甲部は勿論京都の方々にそのポスターが張られていることであろう。都踊りそのものは観られないまでも、張り出されたポスターに心躍らせている。

茶屋あそびしたる気分に朧月

茶屋あそびは芸妓相手の酒色の遊び。しかし金目は勿論、芸事や古今の文芸など素養が無ければ出来ぬ遊芸であつた。その気分とはどんなものか。朧月を見て想像するより無い。

菫野や宝ジエンヌの今むかし

宝ジエンヌはパリ生まれの娘「パリジエンヌ」のもじりで宝塚歌劇団の踊り子のこと。昭和初期のレビュー「パリゼット」以来「すみれの花咲くころ」が歌い継がれる。元はドイツのライラックの花の歌。日本の少女歌劇団には菫が似合うということである。下五の今むかし、「今も昔も」では平板に過ぎる。作者の感慨は「今昔の感」に相違ない。上五の強い切れには「すみれの花」を歌い継ぐとしても昔とは違ふ今を強く意識させるものがある。

五月号

花鳥賊に酔うて秘伝の隠し芸

日本の海には百種以上の鳥賊が生息。その一種、石灰質の甲羅を持つ甲鳥賊が産卵のため桜の時期に近海を浮遊することから、桜鳥賊や花鳥賊と呼ばれる。俳句で知った呼称である。鳥賊は日本酒との相性が抜群、左党であれば「花鳥賊に酔うて」の措辞に誰しも納得する。芝居が好きで作者に誘われ新派を観たことがあった。観劇の後出演の一人を交え会食、興に乗った作者が古い句友と「国定忠治」の天神山の場面を辰巳柳太郎張りの名科白で見せてくれた。畏兄、紫黄師から授かった正に秘伝の隠し芸であった。

減多に自らを詠むことのない作者の稀有な一句である。

花吹雪ビッグシップの船出かな

風光る水くろろがねの厩橋

水明の春の吟行会がコロナ禍への緊急事態宣言やまん延防止重点措置の合間を縫って三月二十九日に実施された。会場は都内本所「ビッグシップ」への挨拶句であり、今月のタイトルでもある。水明雪欄の重鎮山中みどりさんが館長である縁で、二〇一四年六月「紗一忌」以来今回は三度目。マンシヨンなど味気ないビルが減法増えた本所の街に、今にも船出する巨船を思わせる趣の建物である。

厩橋の句、リズム良く五・七・五の定形で読みたくなる。句またがりの七・十音で詠む。大川の水と厩橋の威容を対置させている。巧みな省略と新鮮な感覚に注目する。

本懐を遂げし刀ぞ春の闇

本望と同義であるが、「本懐を遂げ」には仇敵を討つなどの重々しい気分が伝わる。多分人の血を吸った刀であろう。日本刀は鏝をはじめ柄や鞘など拵を凝らすことで表情を変えるが刃文や反りなど刀身自体に固有の凄みを持つ。拵の無い抜身のまま刀架に置かれるさまが目につかぶ。

囀やプリマ・ドンナの休養日

プリマ・ドンナは直訳では第一の女、オペラなど主演の女優を言い、殆どソプラノ歌手が担う。ウイーンの歌劇場で五十年近く前、十年ほど前にロシアのマリンスキー劇場の二回ライブ鑑賞の機会があった。ウイーンでは会場の貴族趣味の雰囲気や鑑賞の気分ではなかった。ロシアではバレエ「白鳥の湖」の公演、奥方たちの興奮に押されて翌朝早くチャイコフスキーのお墓参りのおまげが付いた。クラシックを聴くのは良いがライブは事大主義が鼻につき荷が重く、その二回以外は縁が無い。

休養日となれば、甚平で昼から缶ビールといきたいが、女王然のプリマ・ドンナとなれば全く想像の域を超える。

硯箱

◆季音五月

井口俊晴

下萌や夫婦揃ひのスニーカー

永野史代

春が来た。足元を見ると、枯草色の地面がいつの間にか柔らかな若草に覆われ、散歩に連れて来た犬がしきりと地面を嗅ぎ回っている。運動不足にならないよう、毎日歩くことにしている私たち。そのお供になっているのが、このワンちゃア。それともう一つのお供が、いま履いている夫婦揃ひのスニーカー。ちよつと照れくさいと夫は言うが、若々しいパステルカラーが気に入っている私だ。

地味なれど瓜実顔の古今雛

石山かつ子

今年も雛祭りの季節になった。男性は端午の節句と聞いても何も思わないものだが、女性はそうでもなさそう。幼いころから「お雛さま」には特別な思いがあるからだ。作者もきつとそうだと思う。雛人形の中でも、江戸時代後期に生まれた古今雛は、男雛は束帯、女雛は十二単、当時の上級公家の

正装をまとつて重厚感がある。お顔は現代風の派手さはないが、しっとりした瓜実顔で心が落ち着く。作者の地元の岩槻人形博物館には古今雛の逸品が飾られている。

点点と波の置きゆく桜貝

丸山マスマ

春の昼下がりに、寄せては返す波の音が気の遠くなるような時間を感じさせる。波に洗われた真砂は細かな粒を転がし、手にすくうと、指の間からさらさらこぼれ落ちていく。そんな水が流れるような砂浜の上に、ピンクの桜貝の花びらが点々と散らばって残っている。こんなに小さな貝殻だというのに、春先の穏やかな波は、桜貝を海の深みまで運び去ってしまうことをしないのだ。

野を焼きて埴輪ぼつかりまあるい目

内田恵子

関東平野に野焼きの季節がやって来た。枯草に次々と火を放ち、これから伸びようとする若草に活力を与えるのだ。古

墳時代、いや、それよりもっと昔から、豪壮な野焼きは武蔵野の大地に欠かせぬ早春の行事であった。大きく蛇行する利根川の流れ、あたり一帯には、古の豪族たちを葬った古墳が点在する。その傍では、野焼きの炎にびっくりにした様子の子の輪が、丸い目を見開いて立ちつくしている。

踏青やマリオネットの弾む脚

伊藤敦子

旧暦三月三日、青草広がる野原を歩き、宴を催した中国の故事、それが踏青だとか。けれど、そんな七面倒臭い話はどうでもよい。だって、広々とした野原を飛んだり跳ねたりすれば、子供でなくたって心はウキウキ、悩みなんか吹き飛ばさじやあないですか。大きく息を吸って、澄んだ空気を胸いっぱいにして。そう、マリオネットの人形のように、私たちの脚もヒョコヒョコ動き出します。

大東京を束の間抱き春の虹

梅澤佐江

ビルや街路樹を濡らす雨がひとしきり降った後、空にうっすら虹がかかった。虹と言っても、七色のくっきりしたものではなく、ややぼおーっとして、地平線から天上まで、淡いブルーの空にぼっかり浮かんで見える。今この瞬間も、クルマや人々がたてる騒音にあふれた大東京の街並みが、な

にやら虹の大きな腕に抱きとめられたようで、不思議な安らぎさえ感じるのだ。

稽古へと蛇の目の舞妓春の雨

熊倉千重子

京の舞妓さん、雨の中を忙しそうに何処へ行くのだろうか。お座敷までは時間があるから、きつとお稽古に出かけるのだろう。傍で見ていると楽しそうだけれど、舞妓さんの一日はけっこう忙しい。舞に三味線に唄……と、一人前になるには地道な努力がいる。そこにきて、きょうは雨。濡れて行くわけにはいかないから、蛇の目傘を広げて。碧い目の観光客が振り返って見ているよ。

山笑ふリュックが並ぶ無人駅

後藤綾子

学生時代の友人たちと山歩きにやって来た。卒業して何十年になるというのに、毎年一、二回、グループで泊まりがけの旅行を楽しんでいる。よく利用する特急に因んで「あずさの会」なんて名前まである。目的はコンサートだったり、名所旧跡だったり、相談して決めているが、今回は信州の山になった。近くにお目当ての温泉がある無人駅には、私たちと同じ「お気楽派」のリュックがたくさん並んでいる。この光景を見たら、お山は本当に笑い出すんじゃないかなあ。

季
音
雪



花わさび
波多野 寿子

流れのやうなピアノの調べ白薔薇
亡き友の好きな信濃路花わさび
膝並べ調弦を待つ夏座敷
夕焼の空は朱色にたをやかに
陽とあそび風とあそぶや柿若葉

坊泊り
星野 和葉

青年の歩巾五月を一直線
卯の花や真つ直ぐ行けば赤鳥居
改札出で卯の花月夜を酔心地
卯月波テトラポッドに碎け散る
雨蛙鳴くや今宵は坊泊り

ふはりと 茂木和子

涅槃塚 山中みどり

つと白鷺の涉り歩きをはじめけり
羽衣と紛ふ白鷺舞ひ下りぬ
白鷺のふはりふはつと雲に乗る
築打つや逸る手足を宥めつつ
梁を打つ目尻に鳥の高歩き

鎮もれる献体慰霊塔椎若葉
初蝶の纏れ離れて涅槃塚
常磐木の落葉頻りに深大寺
轉りをSONGと訳し樟若葉
葉桜や墨堤はづれのきび団子

こどもの日 矢作水尾

まどろみ 柚木治子

大空に鯉一文字こどもの日
ふるさとのためく船旗夏めけり
百段の磴にひろがる新樹光
夏めくや骨董店を出る裸婦像
葉桜へ衿を正して能楽堂

吹き抜けの五月の空へトランポリン
御浚ひや薄暑の帯をきつく締め
夏草や秘湯へ迷ふけもの道
まどろみを覚ます鳴き声雨蛙
初夏や星の砂買ふログハウス

卯月浪 由良 ゆら女

霜の別れ 網野月を

貝殻を踏むや立夏の潮の色
現はれて消ゆる少年卯月浪
抜き手切る帆布茜に夕薄暑
露の香の充つる厨や時彦忌
茄子の紺めざめるばかり糠に釘

忘れ霜可能性とは罪作り
麦の秋遠目が利くようになつて
麦秋や妻の眠れぬ気配して
麦の秋妻から貰ふお小遣ひ
風薫る昔揃へたペアカップ

人が何かを 吉住光弥

祝 宴 石井喜恵

妄想に木太刀の素振り春の夜
春の夜や人は獣に又他^ひ人^とに
春の夜は人が何かを待つところ
泣き叫び駈ける春の夜救急車
幼児らにあやされる父母若葉した

針に糸すんなり通る蝶の昼
薫風に舞ふ祝宴の紙吹雪
今日の日の紋付袴桐の花
桐の花富士を遠見の停留所
予後良きと姉の便りや風薫る

新樹の夜 石山 かつ子

業平忌 大村節代

いかづちや捜してひかる耳かざり
小満や研ぎ上げし刃のすぐ曇る
小面の表情恐し新樹の夜
大神宮の新樹の杜に大太鼓
勾玉は胎児の形に若葉風

夏がすみ晴海埠頭の倉庫群
空へジャンプ一本釣りの初鰹
鉄砲玉と擲揄さる男セルを着て
麦笛や末は雨情か廉太郎
玉眼の仏鎮座す業平忌

立 夏 大橋 廸代

胸に秘す 小倉 倭子

左官きて立夏の朝日塗りこめり
ぬつと大鯉のけぞり退る青鷺よ
蔑切や手づくり篋いざ進水
行行子河口にけふる熔鋳炬
ゆさぶりて立夏の風を掴む真帆

芭蕉像の「お身拭ひ」の儀新樹光
芭蕉翁の旅立ちの杖新樹光
ふたつの影ひとつに重ね夜の新樹
ワイングラスの音を合はせし夜の新樹
新茶注ぎ茶柱胸に秘するかな

春の雷 栢尾 さく子

黄菖蒲の丈に屈みて密かごと
今生の影持ち去るや青嵐
春雷や写真主義者の画く岩礁
氾濫のあとたくましましき蝮蛇草
いなさ吹く所在なき日の繰返し

初 鯉 菊池 ひろこ

風薫る大抽斗を抜く作業
初鯉刃跡一すぢ古生姜
新茶の香呼ばれ慣れたる「お義母様」
「五月病」科白のごとく言ふ麦秋
露の雨河童来てゐる吾が背後

緑 風 五明 昇

旅愁また足湯に揺らぐ菖蒲の香
名城の矢狭間を綴る若葉風
山毛櫨若葉水場に憩ふ山ガール
初夏や早瀬にしぶく舟下り
筍を土ごと包むローカル紙

吊り橋へ 境 延昭

吊橋へ妻の手を引く子供の日
初夏の窓に眩しきナース服
楠若葉「楠亭」のフルコース
疾うに人住まぬ窓なり蔦若葉
竹の子よ提ぐも担ぐも難儀よなう

エンジェルボイス 椎野美代子

葉 桜 鈴木康世

何処からかエンジェルボイス若葉風
若葉風外せよ胸の貝釦
若葉光エナメル靴が燥いでる
神鈴の鳴るたび匂ふ楠若葉
若葉光吸ひつくしたる磨崖仏

穂麦活け部屋に清しき風通す
葉桜や墓石の寂びし遊女塚
木鼠の蹲踞の構へ花胡桃
薫風や菩薩も夜叉も胸のなか
葉桜や樹下に織りなす色模様

桐の花 島津初花

風薫る 田寺玲子

葱坊主拳掲げて選挙カー
葱坊主仏頂面を通しけり
葱の花咲かせて逝きし小雨なか
花桐や江戸紫を散りばめし
三姉妹育つ家系ぞ桐の花

礁はむ波新たなる今日立夏
卯波立つ練習船は帆を広げ
風薫る騎馬駈け降りし一の谷
青鷺や水面に暮色ひろごれる
南風吹く淡路通ひの定期船

立 夏 十倉和子

藩侯も仰ぎし樹齡樟若葉

南風呑んで羽ばたけ城の鯉幟

枝わたる栗鼠と目が合ふ子供の日

天守閣けふ薫風をほしいまま

腕捲りして立夏の水を荒使ひ

いのち 永野史代

糸固く結ばれてゐる春の宮

一瞬といふあひ間を消ゆる青とかげ

まぼろしの青かとおもふ青とかげ

一つまた一つ落つ青柿のいのち

真つ直ぐに生きよと天へ朴ひらく

昼寝覚 西山貴美子

存問の筆やはらかく梅雨に入る

昼寝覚ころりと父が消えにけり

夏兆す人間の耳猫の耳

遠雷やりハビリの腕重たくて

這ふ這ふの水溜り越ゆ梅雨晴間

☆

☆

季音月

学校田 原田想子

若狭嶺を映す水田を植ゑはじむ
 顔に泥付けて田植ゑや学校田
 差し足で白鷺鮎の背を歩く
 桐の花ダム満水の水面かな
 郭公の気合に目覚む村の朝

夏立つ 森本早苗

夏立つや大吊橋の潤む朝
 真向ひに子午線の町卯波立つ
 風薫る盲導犬の健気かな
 夏つばめ遠く見送る羽田便
 ひとときを水に流れて水馬

生き上手 丸山 マスミ

渡舟の鱸に泳ぐや鯉幟
 弥生尽今も矍鑠糸切り齒
 生き上手の叔母の笑窪や若葉風
 砂被りに跳び込む勢五月場所
 右すれば国分寺跡麦の秋

蓑 龜 荒井 俱子

風吹かば風にならんと藤の房
 蓑龜の眼とろりと藤日和
 大空を切り裂く初夏の竹とんぼ
 朝掘りと言ふて笥手渡され
 花桐の落ちて地上は点描画

粽 結 藤澤 喜久

菖蒲湯に武将の香氣あり熱し
 粽結ふ祖母は家付き娘たり
 若き日の甦り来る夜の新樹
 月見草「ダリ」の時計に惑はさる
 葉桜や「さよなら」の言葉もう使ふまい

冷し物 鳥羽和風

五月闇蠢くものは皆怪し
角の立つ話をぼつり冷奴
青柚搦る卵豆腐に乗る風味
立て付けに麦茶二杯の仕事振り
雨に濡れ風に首振る四葩かな

桐の花 宇田白鷺

雲流るたびに色変へ山青葉
桐の花トンネルに入る一両車
神木や降りみ降らずみ五月闇
山近く桐の花ゆれ穴太積み
蚪蚪群るるスクランブルの渋谷かな

薫風 井上燈女

バラ垣の中よりピアノセレナーデ
青淵の論語の里へ夏燕
青嵐仁王の足の指足らず
薫風や吾の足跡へ杖の跡
放牛の夏野広げて移動せり

赤レンガ 町野広子

中天に居据つてゐる春の雷
嵩のなき夫の寢床や春深し
葉桜の下に木の椅子バスを待つ
朴の花文明開化の赤レンガ
柚子の花手話通訳の口動く

夏草 高島寛治

新しきピアノが来る日若葉風
卯波立つ高灯台を遠巻きに
大漁旗卯波被りて帰港せり
夏草で乱れし髪を束ねけり
夏草に邪魔されてをり地平線

風立つ朝 森川義子

夏めくや漆光の薨波
藍染の亀甲白き夏のれん
葉ざくらに風立つ朝の通学路
川下る舟葉桜の岸につく
稲荷鮓はち切れさうに子供の日

葉 桜 松宮 保人

掌に落花を掬ふ子等の声
花吹雪浴びて遊歩や天守閣
葉桜や母と娘と車椅子
古民家の壁面白く桐の花
格子戸を閉ざす宿場や五月闇

杜 若 池田 雅夫

明易や淀む時代を変ふる風
凜として動かさず雨の杜若
大玻璃の雲を引き寄せ雨蛙
足裏の張りつく床や梅雨じめり
一雨に黴の館となりにけり

柿 若 葉 大場 順子

少女等の髪に草の香五月来ぬ
兄欲しとせがむ男の子や柏餅
母の忌のはらから達者柏餅
戸を繰るや日の出に間あり柿若葉
乙女等の二の腕まぶし街薄暑

てんと虫 渡辺 舍人

十方世界是れ全身の天道虫
喫茶去に往くと指笛キャンプの村
猫も犬も忘れし賑はひ子どもの日
トマト剥く裸となつてゐる詩囊
振り向けば香水のまた振り返る

点と線 山田 美佐尾

分校の四時のチャイムや桃の花
とんとんと金太郎飴子供の日
鎖場を登り両神雲の峰
新樹光舟漕ぐやうに研師の手
玫瑰やドラマは進む「点と線」

夏めく 内田 恵子

夏めくやひらひら風の抜くる服
夏めくや原つばの石光りだす
神あやす新生児笑み若葉風
夏木立爪先立ちてゆく少女
こどもの子供は跳ねて手足伸び

季の恵み 井関 礼子

青葉潮子の携へ来釣果かな
夫捌く俎上尺余の大鮓
盃進む鮓づくしの夕餉膳
信濃より子の摘み来たる露のたう
露のたう大童なる小半時

青 嵐 川崎 道子

産土の神馬いなく青嵐
青嵐揺らぎて願の薄る絵馬
満願の杖ををさめて夕薄暑
草野球の声援さらふ青嵐
さらさらと洗車の飛沫夏に入る

入れ歯 霜中 冬至

往診の主治医の採血麦の秋
入れ歯してまだ噛み合はぬ麦の秋
令和きて糞蛙殿かくれん坊
番傘を指してみたき遠蛙
更衣一番列車に花が咲く

菖蒲湯 岡野 順子

菖蒲湯の菖蒲の匂ひ肌に沁む
菖蒲湯やばしやばしやと湯を打つ子供
菖蒲湯に浸り瞑想にふける我
菖蒲湯の菖蒲にちよつと触れてみる
菖蒲湯に菖蒲の香り充滿す

立 夏 伊藤 敦子

乳飲み子が風つかみある春の昼
恋の字の画数もつれ目借時
大淀の逆波がくれ残り鴨
大樹いま水さかのぼる立夏かな
春昼や花ひらくごとと赤子笑む

さざなみ 梅澤 佐江

音軽やかに薫風の花鋏
夏めくや飛び出す絵本より翼
まなざしに少女の決意新樹光
ピアフ聴きワインの香る新樹の夜
牡丹散る胸に漣立つ夕べ

五月に

松井 由紀子

遠き日の記憶 点火す 蛇苺
横町をとんと抜け出て五月かな
魚ひそむごと眠りけり 若葉寒
柿若葉瓶^ひ立ちあぐる 陶工房
「雨だれ」の途切れ途切れや走り梅雨

夏兆す

井口 俊晴

春の月 ジャングルジムの檻の中
身にそはぬ 鉄で筍掘る 童
山の端に白き雲湧き 夏兆す
晴の日の続かぬ 憂さや 夏初め
白鷺やすました顔で 泥鰯食ふ

鯉のぼり

上戸 千津子

天空の燭台めくや 松の芯
山里の木々の間に間に鯉のぼり
黄昏や束の菖蒲の香の高し
廃屋を知るや 知らずや 柿若葉
自肅中声かけるなよ 遠蛙

青葉風

西浦 千枝子

熊野路の奥へ奥へと夏来る
尾根道の 柚木に絡む 藤の花
ドライブの窓いつぱいに 青葉風
転勤の人に 教はる 滝見茶屋
幼子や 画用紙いつぱい 風鈴草

麦の秋

野口 和子

下校知らず 村の放送 麦の秋
草取りも 勝手気儘に 家籠り
万緑や 天空の橋 上野村
柏餅 白餡の葉は 薄みどり
カーテンを 漏れ来る 朝陽 夏に入る

薔薇

松山 清子

レビュー 観て余韻の顔に 青時雨
薔薇ゆれて 都電ゆつたり カーブする
プリンセスの名を持つ 薔薇の芳しく
薔薇見ゆる 洋館内の ティータイム
青葉風 川縁に 建つ 忠敬宅

季音花

感染症

近徹徹平

白ゆりや感染症科ナース室
終点の終バスの棚カーネーション
道草の園児のみやげ花なづな
露天湯の灯り点滅狂ふ火蛾
裏町の馴染みのれん初松魚

五月の風

井上玲子

多羅葉に一句をしるす藤の寺
白藤の垂れて菩薩のかんばせを
薫風に袖ふくらませ観覧車
山路ゆく若葉の色に身を染めて
勢ひたつ鳴門渦潮夏きざす

水と油

正木萬蝶

お七夜の寝息に安堵新茶くむ
しやうぶ湯や歩きはじめし吾子の傷
菖蒲湯や水と油のあにおとと
走り茶や我が保護色のうすみどり
走り茶や糸底あらき夫婦碗

青鷺

大塚茂子

卯の花や谷に捨てたき思ひあり
四阿に空木の花の匂立つ
ざざ降りの後の青空花うつぎ
青鷺やまた田を棄つる老農夫
夏めきて京の土産の脂とり

六十五度

河野はるみ

新茶汲む「六十五度」と妣の声
両の手で湯呑みを包み新茶飲む
鶏のけたたましきや夏きざす
うなじ射す陽の恨めしや夏きざす
三社祭荷風通ひし喫茶店

昭和の日 石田慶子

亡き叔母の名入りの新茶叔父より来
やうかんを少し厚めに新茶汲む
原節子・笠智衆ゐて昭和の日
志ん生のおはこ「風呂敷」昭和の日
にんにんと手裏剣の子ら飛魚食ふ

白き指 熊倉千重子

齒科医院出て薫風のやさしさよ
薫る風恋みくじ結ふ白き指
風薫るはしやぐ相似の肩車
跳びつ振り見せて人氣の青蛙
麦の秋外す琥珀のイヤリング

木洩れ日 宮崎チアキ

左ぎつちよの運筆みごと新樹光
産土の史跡訪ぬる五月かな
若き日の母の面影白日傘
色白に寝化粧映ゆる薄暑かな
薫風や木洩れ日つづく遊歩道

夏霞 野平美紗子

大島へ卯波くだくる船の窓
麦秋や山の際まで父の里
麦の秋果はたてに白き雲が立ち
父還る生地の大和夏霞
夏霞女城主の城跡に

つつじ 中野彊

つつじ園奥に秀麗富士の座す
つつじ燃ゆ湖には白き遊覧船
極彩のつつじに人の埋没す
柿若葉ネイルの爪のよく光る
体温は毎日計り柿若葉

鯉幟 菅原知子

早起きし朝刊の香と新茶の香
師を訪ふも豈図らんや古茶のもてなし
吹流し漁村の薨黒光り
俺の名の一字は孫に鯉幟
飛魚の来世は鳥になりたいの

冷 奴

福田千春

指の節氣にして母の汲む新茶
米寿元氣よ今年も新茶樂しめり
慣れぬ機器に一日つひやし冷奴
裏起毛なるチェツクのズボン干す立夏
あご飛ぶやかかつて流刑の隠岐の島

麦の秋

田中章嘉

風吹かば波の音して麦の秋
麦笛を吹いて日暮の道帰る
麦打つて埃塗れの農婦かな
夏めくや庭にホースの長ながと
初夏や昼行灯の月昇る

葱坊主

飛永鼓

蝌蚪生る田靴履くのも一苦勞
踏み入れば散りて集まる蝌蚪の群
幕引きをたぢろぎもせず葱坊主
足早を振花草に止めらるる
葉桜や目差す行く道定まりて

夏はじめ

下川光子

勤行の声よく通る寺若葉
谷若葉煌めき積んでトロッコに
雲の峰ボール一つを皆が追ふ
大群の緬羊帰る雲の峰
睦まじき母子になごむ心太

さくらんぼ

後藤綾子

鯉幟子の声聞こゆ大使館
新樹光濠に迫り出す喫茶店
世は疫山のホテルは百合燦と
野放図に筍伸びる竹の寺
さくらんぼ友の笑顔と共に来る

水玉

野田静香

魚住む沈没船や青葉潮
親子連れビル天空の田植かな
語るかに子猫のパンチカフェの昼
空想に耽くる窓辺や桐の花
草間彌生の水玉ゆるる街は初夏

栢の湿り 日高道を

行く春を追うて水脈引く連絡船
字余りを削る消しゴム春愁
海鳴りは魔物を起こし三鬼の忌
黒南風や舞台稽古の栢の湿り
風薫る大仏様は南向き

山法師 葛城千世子

百八十度の景一望す山法師
試食品びりびり辛し夏に入る
玻璃越しの母の手招きカーネーション
踏み込めぬ岸辺にのびる今年竹
ワクチンの痛み覚え青葉風

復活祭 青木鶴城

出生は敢へて問ふまい磯巾着
大物と言へども小粒蜆汁
真実は引出しの中さくら貝
ひと駅を乗り越してみる遅日かな
誰が為すや月の満ち欠け復活祭

杏 川島典虎

種からと忘れてゐたる杏かな
あと幾日みんな見上げる杏の木
杏成る気の付かないのを許してね
杏熟れ皆絶賛の色付きと
野良猫の鈴成り樅の木の青葉

柿若葉 石川理恵

「ラン活」といふ空騒ぎ街薄暑
髪切つて風もかろしよ街薄暑
欠けてゐる湯呑みも良かり新茶汲む
新茶淹れ先づは遺影に供へけり
その下に秘密をうづめ柿若葉

夏草 佐々木典子

夏草の匂ひ好きだと深呼吸吸
人形の踊る時計や街薄暑
十日病んで天下取られし夏草に
ひんやりと「緋衣」といふ薔薇咲けり
青嵐少女の髪を梳き流す

朴の花 瀬戸雄二郎

天上の父母に手向けの朴咲きし
 朴の花テラスに立てば下に見ゆ
 葉桜や湯の町外れの古本屋
 葱坊主父母の顔知らぬと云ふ
 封切らぬ香水数多遺品なり

句集 恒心 大串章

滝音に目を閉ぢ滝を膨らます

俳人協会会長で、「百鳥」主宰である
 著者の第8句集。平成27年から令和
 2年までの392句を収録した6
 年ぶりの新句集、満を持しての刊行。

第8句集



定価2970円(10%税込)
 四六判/上製/220頁
 ISBN: 978-4-04-884435-2

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ●TEL: KADOKAWA 購入窓口 0570-002-008

特集 伸び盛り！結社イチ推し俳人50人競詠

特別企画 詠めば爽快！最涼の季語

巻頭作品10句

江崎紀和子・奥坂まや・黒田杏子
 長浜 勤・行方克巳・堀本裕樹
 森田純一郎・陽美保子

俳壇

8月号

7月14日発売
 定価900円(税込)

巻頭エッセイ
 復本一郎

八木健選 滑稽俳壇

特別作品30句……池田澄子

新連載

難解俳句を齧る……栗林 浩
 小説・遙かなるマルキーズ諸島……マフソン青眼

連載

ものがたりのある俳句……高柳克弘
 いきもの歳時記……角谷昌子
 俳句史を見直す……秋尾 敏

俳句と随想12か月

菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

『水明誌』を繙く（水明五月号）

大石雄鬼（陸）編集長

舶来のワクチンを待つ山椒の芽（七頁） 茂木和子

コロナ禍も既に一年半が過ぎた。句会の会場が閉鎖されたり、閉鎖されなくても三密を避けるために人が集まる句会ができなくなつてしまった。緊急事態宣言が解除されると自粛要請が緩くなり、句会場も開かれたので、早速句会を開いたりした。しかし昼間は良いが夜間はお貸しできないという会場もあった。バーでやっている句会は時間を短縮したりして行うこともできたが、酒類の提供ができなくなると店が閉店してしまった。それでもインターネットや手紙を使って擬似句会を開いて楽しんで来たが、それも最近飽きてきた。というのも句会は人と会うのが醍醐味であり、句会の後は酒を飲んでくだを巻くのが楽しいのである。

コロナ禍が始まった頃、識者はワクチンはあと二、三年しないと実用化しないなどと言っていたが、それはあくまで日本のことだったのである。昨年末には海外でワクチンが実用化され国によつては素早い対応で接種が進んだ。日本は自国のワクチン開発ができず、海外から素早く持つてくることもできず、結局接種が始まったのは四月ごろである。掲句では「輸入ワクチン」とは言わず「舶来のワクチン」と書いて、ワクチンに対する渴望感がよく出ている。「山椒の芽」は日本料理には欠かせぬ存在であり、ワクチンの必要性を大いに思わせる季語である。

ディスタンス・エヴィデンスとや黄砂ふる（一六頁） 菊池ひろこ

これもコロナ禍の一句。ディスタンスは距離。コロナの感染防止策としてソーシャルディスタンスとかフィジカルディスタンスのように使われた。社会的距離とか身体的距離を保つと言う意味である。その距離は二メートルくらいだ。

エヴィデンスの意味は「証拠」とか「根拠」。ソーシャルディスタンスと違い昔からエヴィデンスは使われてきたが、コロナ禍では「〇〇治療がコロナには効果的であるエヴィデンス」、「ワクチンが効果的であるエヴィデンス」と言った使われ方をして、コロナと関連してこの言葉もよく耳にする。

「とや」は伝聞あるいは不確実な内容を表している。作者はディスタンスとエヴィデンスを不確実なものとして捉えているのである。「ディスタンス・エヴィデンス」と並べて書かれると、その調子の良さも相まって、本来ならばコロナ禍でもとても大切なものである「距離」と「証拠」を薄べらなものに落としている。

黄砂が降ると視界が悪くなり、車が汚れたり洗濯物も外干しができなくなる。俳句では重宝されてきた季語であるが、黄砂は実体のある嫌なものである。この句では「黄砂ふる」が「ディスタンス・エヴィデンス」をディスタンスの方向に働いている。コロナ禍で胡散臭いものがいろいろと見えてきたが、胡散臭さをうまく捉えた句である。

現代俳句鑑賞

網野月を

古本に残る薄紙百千鳥

寺澤一雄

〔俳句四季〕5月号・夕蛙より

上五中七の「古本に残る薄紙」とはグラシン紙のことではないだろうか？古くは岩波文庫などの文庫本はこのグラシン紙で表装されていたものである。まだ☆一つ五十円の時代のことである。座五の季語「百千鳥」は、句意から離しているように思われるが、質感を同一にして、絶妙に関係性を有している。視覚で認識する「薄紙」と視覚もしくは聴覚で認識する「百千鳥」の配合が上手い。他に「木口から泡の出ている松の櫓」がある。観察眼の確かさを証明するような句である。この「泡」は単なる泡ではなく、松脂が含まれているので膨れたりして、見えて飽きない趣を持っている。

ワイパーの横 一列に花の塵 芦川りさ

〔俳句四季〕5月号・瑠璃蜥蜴より

花散る季節に愛車に積もった花弁である。ワイパーを 작동させた所為で一列になったのだ。座五の季語「花の塵」に拠って少々ネガティブな要素を含んでいる表現になっている。

花弁はまだ良いのだが、薬は油分が含まれていて厄介なものである。

丹頂の雛連れ歩く牧の隅

安田豆作

〔俳壇〕5月号・近詠より

「丹頂」は、ダンスと鳴き合いで知られることが多いようだ。タンチョウヅルとも呼称されるが、和名はタンチョウが正しい。通常二卵を孵して、内一羽が成長するようである。中七の「…歩く」は終止形かも知れないが、続く座五が名詞であるので、連体形として認識できるだろう。とすれば一句仕立ての句であって、最終的には「牧の隅」という空間を主眼とする句になっている。

蛇穴を出づ彼女の笛が聞きたくて

谷原恵理子

〔俳壇〕5月号・人形座より

「蛇」が「聞きた」いのであれば、虚構であろうし、作者が「聞きた」いのであれば「蛇」は擬人法的叙法である。少なくとも「蛇」は作者自身が投影されているということである。季語の存在感、有効性をどこまで担保するのかは、作者

各人に任されている。

翳りても曇らざりけり春の水 西村和子

〔俳句〕5月号・ひとり歩きより

座五の季語「春の水」の本質を鋭く指摘している句意となっている。具体性を示す具象は無い句なのであるが、読者が想像するに委ねた景の中で、「翳」つても決して「曇ら」ない「春の水」の在り様がまざまざとしている。他に「初桜ひとり歩きに如くは無し」がある。座六の「如くは無し」をどう解釈できるか？読者の力量が問われているようだ。筆者は、自由に歩く、自分流に歩くというように捉えて、「初桜」に「ひとり歩き」を許容してもらっていると読んでみた。

芹摘むや角のとれたる風を頬 関根誠子

〔俳句〕5月号・沈黙より

座五の「風を頬」は「曝されている」が省略されているのである。中七の「角のとれたる」はいかにも春であるし、上五の季語「芹摘む」が句全体に行き渡っている。作者の日ごろの作品から推量すると、少々大人しいようである。

ポケットの小銭のをどる夕立かな 畑 佳与

〔俳句〕5月号・一知一忘より

想像の広がる句である。「小銭」の遣い途は？「をどる」とは手を「ポケット」に入れてのことであろうか？はたまた

雨に当たらないように走ったからであろうか？等々である。きつちり形を決めて、読みを決める句もあるが、読みのある部分を読者に任せてしまう句もあるのだ。座五の「夕立」と「小銭」の配合が掲句の生命線ということである。他に「梅雨月夜好きも嫌ひも女偏」がある。

裾出して羽織る綿シャツ青嵐 森野 稔

〔俳句〕5月号・新作巻頭3句より

構成力のある句作なのである。「裾出し」するのはアメリカ人でポロシャツなどは常に出している。一方イタリア人は決してしない所作である。日本では開襟シャツを「裾出し」する風俗が戦後流行ったことがある。質感の統一された句は、分かり易くて、季語に拠って読解することができる。

猫の子に机と椅子の脚ばかり 澤 好摩

〔俳語〕『円錐』89号・雀の世より

一句仕立ての句であり、上五の季語「猫の子」が句全体の主語となっている。上五を「……に」で、中七を「……の」で繋げている。ただ、上五の後に「とっては」が、また座五の後には「が見えている」が省略されているのだ。作者は、文法について、特に助詞の使用方法については手本のような俳人である。筆者は、常に参考例として勉強させて頂いている。「澤好摩先生が遣っているのだから大丈夫だよ」と。他に「わが古りし生年月日や雪柳」がある。

自選二十句

野田静香

スマホから視線飛ばして帰雁かな
地震過ぎて額縁正す余寒かな
蘇る若狭の風や蒸躰
囀を聞きつつ回る風見鶏
夏めきぬダメージーンズ闊歩せり
麦の秋卒寿がジャズを駆ピアノ
郭公の声オンラインに紛れ込む
降り立てば古き駅舎に薔薇の門
舟を押す佐原の風や夏柳

散り残る萩の白さよ夕の風
篋に射し込む光秋の声
カフェの灯が消えて岬の星明り
秋夕焼生徒二人の連絡船
晩秋の鐘山里の音となり
心電図胸の奥までそぞろ寒
老犬の影引く野道冬はじめ
残照の沼に影置く浮寝鳥
風花や赤子の髪に光来る
炬燵列車お国訛の賑やかに
もう一人の我を励ます初鏡

心象句の有段者

網野月を

氏の作品を総括すると、掴みどころがないということであろうか。というのも技術的には既に大方の技法を使いこなして、偏ることがないからである。敢えて重ねたり、敢えて外したりもする。故意なのか自然にそうしているのかは分明ではないのだが。

多分、そこには読者を陥れようとする罠が設えられているのだが、その罠に分かつていても嵌まってしまふのだ。もちろん氏には罠を仕掛ける積りはないのだ。ただ氏の作品にはそんな世界が広がっているようだ。もしかしたら凄まじい大器であつて、まだまだ総体が現れていないのかも知れず、これから見守り続けたい作家なのである。次に五月号に掲載の受賞対象句抄を鑑賞したいと思う。

秋の川面影橋の暮れ残る

構成力が優れている。確か、早稲田大学の近く、神田川に「面影橋」というのがあつた。今でも残る都電の駅があるところ

である。上五の季語「秋の川」であり、座五の「暮れ残る」であり、出来過ぎている構成なのである。

帰り花米寿の叔母のハイヒール

上五の季語「帰り花」と中七座五の句意が少々付き過ぎている。分かりやすいのであつて、これは身内のアルバムの御句で、大切にとつておいて欲しい句である。

日脚伸び舟の影曳く佃島

上五の季語「日脚伸び」で切れているので、中七と座五は繋がっている形なのである。「……曳く」は連体形であり、句意は、「佃島」が「舟の影」を曳いているのである。もしくは「舟」が主語で「佃島」は空間の指示なのである。こういった複雑な構成の句を作る作家でもある。ここ一年くらい句会を共にしている筆者は、もしかしたら無意識にこういう句作りをする作家かも知れないと、近ごろ疑い出したところでもあるのだ。

下萌や我に囁く応援歌

「下萌」に励まされる氏の心情は、俳句をされる方々なら誰しも共感するところであろう。

臆なる稜線後に発車ベル

「後に」をどう読むかである。「のちに」か「うしろに」か？「のちに」ならば時間的把握であり、「うしろに」ならば空間的把握である。「うしろに」と読むと中八となるのだが、もともと句跨りの破調であるのでそれほど無理がないようだ。「稜線」とあるので時間的把握が妥当であろうと考える。

百年の校舎を隠す桜かな

モティーフとしては揃っていると思う。それだけに分かり易くて、こういう癖のない句作りもする作家なのだ。

蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚

心象句である。将に「夢」の中の空言なのであるが、ここまで確信をもって叙せられると、納得せざるを得ませんね。七五五のリズムが空言を助長していて、破調が功を奏している。

黒南風やデモ行進の蛇行せり

秀句である。上五の「や」切れ、座五の「せり」の半切れが二物衝撃の醍醐味を感じさせる。筆者なら「せる」としていたことでしょう。

美容室の鏡の中の七変化

鏡に映し出させる紫陽花の切り花であろうか？鏡の中の氏ご自身の景にも通じるところがあるということであろうが、

もしかしたら第三者的視点からの構成で、着付けをする娘御の様子でもあろうか。

秋の川友禅染に生宿る

「宿る」であるから「生」が自身で宿るのである。「宿す」ならば、洗い師が「宿す」ことになるのである。糊を洗い落とすことで「生」が将に生まれるのである。こういった自動詞と他動詞の使い分けの工夫も見事である。

続いてこの一年間の『水明』誌に掲載された句から、筆者が特に秀句と思うものを挙げる。

郵便受けに送り主なき落葉かな

冬めきてささやき残る耳愛し

卓上にパンジーの束人を待つ

鱒刺や時に鋭き十五歳

蓑虫やメトロノームの気だるき夜

「郵便受け」「冬めきて」「卓上に」は秀抜である。こういう自選がこれからは「花欄」作家として求められると思う。「鱒刺や」「蓑虫や」は良くできているのであるが、季音同人としては物足りない感があると愚考します。要らぬお節介であります。自分、心象句は禁じ手にするという手もあります。多分、無意識に心象的作句を敢えて禁じて、取り組む時期になつたかと考えています。これはエールのつもりですよ。

自選二十句

日高道を

蜃気楼我が青春の海遠し
年用意女三代姦しく
初東雲朱華色差す鬼瓦
花種の一つひとつに有る未来
台風的眼を突き抜けし鷗かな
枯菊や母の介護に残る悔
松過ぎて客待つ車夫の力瘤
二の腕の白さ気にする少女初夏
夫々の家それぞれに聖夜かな

啓蟄や父の書齋に女性客
髭さする土用芝居の女形
カルタゴの海の青さよ花石榴
食ひ違ふ親子の思ひそぞろ寒
目が覚めて夢の彼方へ宝船
笑はせてなぜか悲しき猿回し
つはものの生死を分けし白襖
松明に浮かぶ童女の白重
夏の灯や島にひとつの診療所
ライオンの声ぞ悲しき夜の秋
秋風や庭に真白き椅子二つ

叙景の巧者

網野月を

進境著しい作家である。端的に言つて、作句において試行錯誤を繰り返すことが垣間見えることもある。それだけにこれからどれだけ広く、深く境地を切り展げるのか期待大なのである。まだまだ自分の句を探し続けている作家であり、もしかしたら一生探し続ける可能性を有しているかも知れないのだ。むしろゴールインして欲しくないという筆者の思いが其処にはある。そうだとしたら果てしなく大きくなることのできる素因を内包している訳で、これからも見守りたいと思う。次に五月号に掲載した受賞対象句抄を鑑賞する。

目が覚めて夢の彼方へ宝船

上五の「目が覚めて」と中七の「夢の彼方へ」は少々、付き過ぎている感があるようだ。

ミサイルの似合はぬ青よ初御空

秀句である。時事をテーマにしている句のようにも思われ

るが、日本人の正月の初御空への信仰にも似た感覚を逆説的に叙している。

春風に踊り出したる四分音符

上五の季語「春風」と座六の「四分音符」がよく符合している。こういう感覚の表現は、言葉への信頼感が必須であつて、だからこそ読んでいて安心感があるのである。

松明に浮かぶ童女の白重

夏季の神事でしょうか？神楽舞でしょうか？空間の情報は上五の「松明に」だけなので、読者が想像するしかないのである。それでも座五の季語「白重」が、景を結ぶのに十分であろうと思われる。秀句である。

芽柳や銀座の母は今いづこ

「柳」と「銀座」はコントロールされていて、質感が増している。が、どちらかを整理することが出来るようにも思われる。

夏の灯や島にひとつの診療所

ドクターコトーのような感じである。作句の経過、時空間を問いたいところである。

蝸牛破産知らせる紙赤し

上五の季語「蝸牛」の幹旋が見事である。季語からの作句

ではないだろう。中七座五が出来上がってからの季語の斡旋と推測する。時候・天文の季語であったら、良句になる可能性があるが、返って句が展いてしまふのだ。「蝸牛」の斡旋は、集中する句に仕上げたかったからだろうと考える。

ライオンの声ぞ悲しき夜の秋

座五の「夜の秋」は夏の季語である。ライオンにぴったりだ。その分、上五と座五の間の中七の展開が自由になる訳である。中七の意味は作者の心情である。「悲し」き声は客観ではなく、作者がそう聞きとったことである。筆者は、ただの叙景ではなく、作者が句中に存在している句作を良句であると評価する。

野の花の一つひとつにある音色

上五の季語「野の花」は、多分、視覚的に捉えたものであり、座五の「：音色」は聴覚的な把握である。句意も哲学的な雰囲気を有した句になっている。いわば箴言でしょう。これはばかりを並べられても趣がないのであるが、五句の内に一句入れて、表現域の多様性を追求して欲しいと考える。

立冬やスカイツリーの影の街

本所か、浅草辺りであろうか。スカイツリーを見上げるような位置関係の街なのである。スカイツリーに関係性を持つ街を上五の季語「立冬」で把握している。少々、季語の斡旋

に不確定性があるかも知れない。

以上「ミサイル」「松明」「蝸牛」「ライオンの」「野の花の」の句は秀句である。加えてこの一年間に『水明』誌に掲載された句から、筆者が特に秀句と思うものを挙げる。

笑はせてなぜか悲しき猿回し

初富士や湖水に浮かぶ鳥居は赤

畳なはる越の山山春早し

春北斗輝くあたり越の国

いずれも大胆な叙法が奏功している。「笑はせて」は座五の季語「猿回し」が猿回師のことではなくて、事柄のシチュエーションで捉えている。僅かなことなのだが新味があるようだ。「初富士や」は冠雪の富士の白と鳥居の赤が見事に新年を寿いでいる。視覚的な句で、作者の得意分野である。「畳なはる」は山並みを俯瞰する視点の高みが精神的な高さを表している。「春北斗」はまるで少年の様な句である。

氏は叙景の巧者なのです。つまり読者は読後に景を浮かべることが容易なのです。それだけに氏の個性が反映しづらいくらいも出てくるのです。作者の個性を前面に押し出すのか、隠し味にするのかは、句意に拠って捌くことでしょうか、「あつこれつ、道をさんの句だよね」と名乗り以前に分かる句を期待しています。

自選二十句

青木鶴城

つぎはぎの記憶のパズル春の雪
雪柳穢れなき時吾にあり
手直しの朱墨の湿り春浅し
仰がるる殿様となれ蛙の子
蹲踞して霊水掬ふ春の山
大木の上に夢あり蝸牛
ががんぼやこれ見よがしの無重力
始まりは先づ「とりあえず」ビールかな
真実を明かさぬままに草茂る

幸運が来た来たダブルレインボー
秋時雨頭にかざす手の広さ
急登の霧と鎖と力瘤
死に下手の父の日記やこぼれ萩
秋うらら真鯉水面の雲を吸ふ
小鳥来る話上手な年寄りに
いつよりか疎遠となりて神無月
腕を組み瞑目すれば木の葉雨
枯園やおとぎ話の蜜と毒
ゆつたりと地球を回す鯨かな
大股で若者を抜く冬霞

広角な作法

網野月を

二十数年前、某大先生から「はじめて数年が大切ですよ」と筆者は言われたことがある。その時は既に二十年以上も作句に取り組んでいたのであるが、氏は大先生の仰る通り初めて数年を大切に過ごした作家であろうと思う。はじめは月毎に一回の句会に参加して、徐々にのめりこんでいくのが通常であるが、この作家は初めからいわゆる「俳句漬け」になっていた観がある。多分、「俳句脳」になりかかっているのではないかと疑っているところである。

はじめはオーソドックスな句作りが常であったが、最近是将に広角な作法が氏の特徴になっているでしょうか。次に五月号に掲載した受賞対象句抄を鑑賞する。

初霜や心の解けていくやうな

上五の季語「初霜」と中七座五の句意は逆説的な構成になっている。「解けて(ほどけて)」と読ませて、霜解けのイメージと被らないように工夫しているとすれば「心解けて」で

も良いかも知れない。

鍛錬の一打の冴えや福寿草

座五の季語「福寿草」からポジティブな表現の延長線上に句意を設定していると思われる。「鍛錬の一打」は剣道であろうか？氏の社会活動を勘案すると野球であろうか？それとも趣味から考えるとゴルフであるかも知れない。

鶯や運び留むる筆の先

中七の「留むる」の訳が、「鶯」の鳴声であるのだが、上五は切れ字「……や」で確と切っている。こうすると原因と結果の繋がりが薄れるのであって、氏が確かな技法を身に着けつつあることを表す証左になる句であろう。

丸めたる紙の匂ひや光悦忌

座五の季語「光悦忌」が効いている。中七の「紙の匂ひ」は虚構かも知れないが、座五の季語でしっかりと抑えていて揺るがない。普通ならば絵の具の匂ひにしてしまいたいのである。「丸めたる」は反故にしたということであるから、具象も明確に呈示していることになる。

行く春の太極拳のテンポかな

成立している句である。がもう一押し欲しいところである。

仰がるる殿様となれ蛙の子

構成としては、中七の「……なれ」がお玉杓子への呼びかけになつてゐる。が中七後で切れてゐるとすれば、作者がお玉杓子を見ながら、誰かにエールをおくつてゐる句意とも解積できる。

捺染の老舗の暖簾閑古鳥

上五中七の句意と座五の季語「閑古鳥」のいわゆる離し方が、絶妙である。

さやけしや打首めいて躰り口

冒険している句作りである。上五の「さやけしや」と逆転の取り合わせの中七座五の「打首めいて躰り口」はシリアスでもあり、行き過ぎていてかえつて滑稽でもある。この句以来、筆者は、茶会のたびに客が打首になつてゐるように見えるしまうのである。

長き夜や三角形の二辺の和

氏の本業である建築士ならではの創意であろう。上五の季語「長き夜」は付いてゐるようにも思われ、また季語の説明のようにも読めるのであるが、秋の夜を三角形に捉えたところには新味があり、ある意味での哲学さえも感じられるのである。

友の有り囲炉裏の酒に夜を混ぜて

「学而」編からの発想であろうか。少々悦に入つた感があるのだが、酒席の句であるからこういう句もあるのである。以上「丸めたる」「長き夜や」は秀句である。続いてこの一年間の『水明』誌に掲載された句から、筆者が特に秀句と思ふものを挙げる。

吾が影の動きし光の冬葦

時ならぬ空の剥落花の雨

堀越しの誘ふ気配や夜の梅

三句とも秀句である。「吾が影の」は冬葦に「光（こう）」を発見した作者の観察眼を評価したい。「時ならぬ」は座五の「花の雨」の景の叙景でしようか、「花の雨」の叙情が際立っている。そして「堀越しの」は座五の季語「梅」を見ているのではなく、嗅覚で把握してゐるところが、将に「夜の」なのである。仄かな風のある静かな夜を想像する。

どうしたら俳句になるのかという段階から、どうしたら鶴城句になるのかを求めて欲しいのです。広角なだけにテーマ性の部分で個性を発揮するのは難しいかも知れません。また心（句意）が形（叙法）を要求するのですから、叙法での個性の表示は邪道の極みでしょう。これからの俳道はラビリンスかも知れませんね。

俳誌望見 梅澤佐江

【四季】 令和三年三・四月号 通巻六五二号

主幹 松澤 雅世 発行所 東京都文京区

昭和三九年一月、松澤昭が東京で創刊。師系飯田蛇笏、松澤昭。「有季定型による心象造型をめざし心象美を追求する」を理念とする。

主幹詠「春気」一五句より

凍蝶のかすかに笑ひ懸想する

寒さの中羽搏くこともせずじつとしてゐる蝶。ふと翅を動かしたような気がして蝶をよく観ると微かに表情が柔らぎ嗜嚙として求愛をしたのである。あれは蝶の、否作者の白昼夢であつたのだろうか。

うたた寝醒め立春大吉たらんとす

春風とともに寒さも和らぎ思わずうたた寝をしてしまった。思えば今日は立春、今年も一年無事に過ごせるよう禅寺のお札を貼った気持で念じてゐるのである。

言ひ訳をしたせい寒の戻りなる

少々潔さを欠く言ひ訳をしてしまった為に、春の気配が感じられていたのに寒さがぶり返してしまつたのだと自己言及のパラドックスに、自身を突き離して客観視した心象造型を見た。

幼馴染みに出逢ふなら雪の夜

降り積もつた雪はいつもの風景を一変させ幻想的で美しい。

雪の夜が醸し出すのは静寂と人恋しさ、懐かしい幼馴染みのあの人に出逢うなら雪の降る夜がいい。真つ新な雪が過ぎ去つた年月を消し去り無垢な二人に戻してくれる。が、舞い降りてきた雪は触れた瞬間に跡形もなく消える儚さも秘めているのである。

枯枝に宿りし昔気質なる

冬空に太い一本の幹から枝分かれして網の目のように空間を埋め尽くすばかりに伸びた枝の繊細な美しさ、もうすつかり葉を落して枯れたかのような枝も来るべき春に備えて律儀にも力を蓄えている。頑固な程に全てを削ぎ落とした真の強さである。

全句を通じ、心象風景・心象美を鑑賞させて頂いた。

弥生集・卯月集 六名 各七句より 三名

春山のどつしり麒麟くるまでは 松田抱空

うつすらの雪へ温故の顔さらす 河村正浩

万葉の風の振舞ひ山眠る 石井長子

月下集 八名 各七句より 三名

怖いもの消えゆく様な淑気かな 中山文字

葉牡丹の混沌千波万波寄せ 遠藤久子

マカロンの色とりどりの春愁い 瀬藤芳郎

四季集佳作 主幹選 二二名 各七句より 三名

カラフルなマスクに不易流行を 広井和之

さくらもみずるすべて父母のため 佐々木克子

寒椿正念場とは落ちてから 藤井康文

四季集は雑詠で全員投句の企画となつてゐる。

山本鬼之介 選

水明集

地図になき山の分岐の露のたう
のどけしや居眠る母の手にバナナ
のどかさゝに亀と会話の心字池
春嶺を登りつめれば里の風
待ち人遅したたむ女の春日傘

さいたま 洪谷きいち

囀に待合室の憂さ忘れ
春泥をつけて尼僧の白緒下駄
トルソーの傍にピンクの春日傘
太棹のじよんがら節や花齋
画眉鳥の囀四方を独り占め

高崎 原田秀子

南指す海舟像を飛花落花
制服は少し大きめ桜貝
青春の盛りは八十路桜貝
かつて此処に「銀巴里」ありき花雲
春の月仲見世に買ふ館こ玉

さいたま 染谷正信

軍港の寂れしバーのヒヤシンス
球児らの夢は一軍風光る
春の園ボニーに触るる親子づれ
春の園池に伝はる姫の悲話
花水木門扉を閉ざす大使館

橋本京子

墓地の隅風に揺るるや花齋
小ブーケの中に堂々花なづな
大正の雄渾の筆春惜しむ
早天の雀囀る目覚めかな
飛び交はし囀り交はし空自在

東京 鈴木和子

春の鳶ま昼の月に舞ひ唄ふ
花筏人情嘶を生みし橋
ふるさとの畦の香よぎる草の餅
囀や並びて古りし十二神
春の風托鉢僧に纏ひつく

さいたま 曲淵徹雄

桜散る風に後れてどつと散る
大手門くぐれば桜ふぶきかな
輪唱も掛け合ひもゐて囀れり
大空の粒となるまで囀れり
草餅やパリに赴任の日も迫り

上尾 横山君夫

行く春や豪華列車の尾灯消ゆ
神木の四手濡れそぼつ菜種梅雨
菜種梅雨警策響く座禅堂
初出社見送る門の花水木
夜桜や見上ぐる先に軍星

さいたま 村杉清吉

三月来青春の門ひらきたり
強東風の波頭の彼方白き富士
春苑の小鳩の舞踏いつまでも
初蝶の風鐸かすめ相輪へ
花衣互ひに褒むる八十路かな

さいたま 保坂翔太

満身に飛花を浴びつつ遊歩道
堰を出て散り散りとなる花筏
春眠や耳をくすぐる犬の舌
遅刻の訳を考へてゐる朝寝かな
大朝寝緩みしままの脳の箍

笹本啓子

春眠や校舎の窓の飛ぶカーテン
フルートの奏でたなびく春の暮
遅桜露店の夜空輝かす
境内に猫と座りし花ぐもり
えんえんと色を重ねし花筏

梅澤輝翠

瓜棚を急に飛び出す熊ん蜂
枝先を浅瀬に伸ばし桜満つ
遠蛙田なかを走る飯田線
鍬を背に母子の家路夕蛙
畑おこし百鳥寄り来春深し

西幅公子

菜の花や黄の帽子ゆく通学路
風渡る武蔵丘陵囀れり
囀りや高き産声厩より
日の匂ひそつとたたみぬ春日傘
正論は時に悲しや朧月

熊谷 越田栄子

春日傘母の想ひ出開きけり
急坂や思ひ出多き春の山
花びらが即かず離れず川のどか
タンポポに降る花びらよ遊歩道
春の日傘に蕊降る川辺友と行く

塩野久子

一礼し鳥居をくぐる春日傘

輪唱の列を吞込む春の山

黒毛子猫のその名夢二か漱石か

見番に通ふ舞妓よ春日傘

長閑さや海側席の五能線

さいたま 新 曆文

鷹鳩と化して退職辞令の日
天守へとみつば躑躅をたどりけり
遠足の独りある子の側へゆく

若狭 檜鼻ことは

正眼に構へし歛ぞ実篤忌

剃り跡を撫で出勤風光る

リモートの入学式をカフェで見
歩をゆるめ馬車道ゆけば花吹雪

廃屋の庭に今年も八重桜

弾丸のやうに蜂くる遊歩道

平塚 丸屋詠子

春燈や毗紅く立役者

切株の年輪かぞふ日永かな

うららかや原のテントの人眺め

風光る遠くに富士の見ゆる湖

満開と言へど控へ目花山椒

さいたま 斎藤みよ

朝寝せり貨車の音とて何の其の

幽霊も泥鰌も住むらし川柳

共に見む靈丘の紅き陽を

ドローン去らず白蝶舞ひ続け

よちよちと桜吹雪を捉まへに

伊予 向井章子

山独活に語るほかなき静寂かな

花の彩褪せて余命をたぐらるる
鯉はねて彩の崩れし花の池
爪剪れば爪が曳き出す春愁ひ
花なづな満開農具光らせて
句を詠みて舌に転ばす四月馬鹿

熊谷 神田治江

風光る下町繋ぐ鉄の橋

琴の音が眠りを誘ふ小春の昼

澆刺と袴姿の花衣

蒼穹に映ゆる辛夷の田圃道

色色のテント賑はふ春の園

さいたま 反町 修

手を口に欠伸おさへる目借時
恋猫の人声に似て気はづかし

センサーライト照らして過ぎぬ恋の猫

草餅やとびきり旨い茶をいれよ

農機具を整へて八十八夜

若狭 山崎郁子

亀鳴くを拾ふ補聴器もとめたり

生家広し鏡の中の花衣

百歳の人と車座花筵

朽ちたるや兵士の墓よ花の滝

四阿の午後よ蛙の目借時

蓮華草畔まで迫り波のごと

磯あそび指を鳴して犬を呼ぶ

岩の間に小蛸隠るる磯遊び

ごきげんようつまめばほほほ雛あられ

小さき手に小さき器の雛あられ

春眠や途切れ途切れのドラマ終ゆ

遅桜本丸跡の一本樹

はぐれ蜂南天の木を仮宿に

満つる春五感くすぐる齢の身

さよりの日を恙がなしやと春の暮

軍服の明治の祖父に百合の花

光浴び出づる神秘や春の園

菜種梅雨白きメットの通学路

機関車の煙たなびく菜種梅雨

ひと雨に光輝く春の園

さいたま 加藤でん治

新井孝磨

竹澤和子

千坂平通

杉戸 佐々木史女

さいたま 菅原真理

伊奈 菅原卓郎

草加 外村紀子

花冷や万葉歌碑の相聞歌

花冷の客待ち顔の焼そば屋

ゴム風船手から離れて空高く

親方の赤のバンダナ風船売り

薬売りのくれし六面紙風船

春眠にもて遊ばれし今日ひと日

娘の恋も華やぎとどめ遅桜

街並に溢るる木の芽光満つ

小さき手の綿毛ふんはり春の行く

春眠しテレビドラマが切れ切れに

ふらここの風が捲るや母子手帳

使ひ始むる鞆の柄長し穀雨かな

通り名は未だ褪せずし荷風の忌

穀雨かな屋根打つ音に二度寝せり

朝明けに茶柱二本穀雨かな

渡し場の風ゆるやかに桜餅

風わたる吾妻橋より花見船

黒猫や見返り坂の春の昼

「序の舞」の指しなやかに暮の春

黄昏のオープンカフェや春めけり

ちやん付けて呼び合ふ仲間山笑ふ

さいたま 本橋稀香

種芋や我が身やつるる子沢山

春日傘一篇の詩を翻す
缶ビール一つ気に呑むや春の山

さいたま 篠崎紀子

生まれざる命点蠅蚪の紐

田園がつづく長閑な車窓かな
猫の子を抱いて文書く夜の静寂

冴返る点字ブロック探る杖

図書館の静けさ破る軒つばめ

中国語英語ハングル花見山

囀や一里塚なる大塚

春日部 仲田利子

川口 新井のり子

囀や湖に舫はれ遊覧船

目に染むる手向けの一枝桃の花
人気なき宿の坪庭桃の花

本物の草餅だねと夫の言ふ

半日のゆつくり動き暮遅し
夕永し吾子の縄跳び十数ふ

クラス会草餅を買ふあの老舗

群れ鳩が螺旋を描く遅日かな

道の駅軒端行き交ふつばくらめ

一筆や妻の書き置く草の餅

さいたま 安倍弘夫

アリユーシヤンの海は紺碧鳥帰る
湯を掛けて緑生れぬ若布かな

さいたま 池田珪子

万歩計見てにつこりと草の餅

花散りぬ幹は泰然自若なり

春逝きて猫もぐつすり膝の上

雪解けや名もなき川の高き音

囀やそつと盗み見裏の藪

露味噲を小さき九谷に大吟醸

百千鳥の泣く子黙らす奇想曲

囀や復興の地にピザの窯

春日部 諏訪サヨ子

春の夜鳴らしたものよ六本木
桜貝亡き母の黙謎のまま

吉川 杉浦理恵

武蔵野の風土包める草の餅

蛙の受難覚めれば田無く仲間無く

三代の搗きし賑はひ蓬餅

子がせがみ花見の後に花屋敷

浅草の車夫の客寄せ花の雲

桜貝守りて拳開かぬ子

白鷺の翼一閃恋の舞

憂ひあるラジオの声や夕永し
遅き日や八十路の足に長い橋
草野球精魂つきて夕永し
黙食のステーキハウスに枝垂桃
三匹の野良猫遅日をもてあます

さいたま 藤岡真知子

千年の一本桜と生くる村
日暮時あでやか残す紫荊
兄弟子の演技見つむる春帽子
親の気配に首をもたぐる巢立ち鳥
春光を包み北行き貨物過ぐ

さいたま 岡田宣子

妻とても入れぬ墓や囀れり
囀やひとのいのちは消ゆるもの
囀やこの道行こかもどろうか
囀や独り占めして散歩道
楽焼に閑かな光春惜しむ

高橋敏子

武田重子

黒髪や靡くピンクの春シヨール
大朝寝カバン抱へて大慌て
案ずる子朝寝の母を覗き込む
朝寝して夢はセーヌのパリジェンヌ
喜寿祝ふ仕出しの膳の桜鯛

ひるまずに風にラッシュユヤ花の滝
農事暦八十八夜の後継者
山吹の揺るる盛りや屋敷跡
ランナーの聖火持つ手に穀雨降る
時節柄拝観ひそと射干の花

若狭 岡本祥子

水野興二

寄切りでやつと白星桜餅
サッカーの試合連れ去る春の雷
太りたることもあるのか恋の猫
地虫出づここは何処かと眼をさすり
久に來し彼岸の入りの寺筈

紫雲英田のげんげ鋤き込む農作業
藤棚の傘の内にて笑ひ合ふ
藤を見て牡丹見し夜の火照りかな
どつかりと満天星の咲く長屋門
花いかだ川の流れの静かなり

蕨 細井良子

山戸美子

うららかや座れば鳩の近づきぬ
うららかや笑へば笑ふぬひぐるみ
近き死を描きし母や春深む
春うらら「暇で暇で」と電話来る
袖を詰めズボン詰めて新入生

柳根に光る水音鯉の群

越谷 阿部幸代

東京 水落守伊

駆け上がる子にやはらかに土手青む
乳飲み子の重たくなりて春深む

読み切りて古書の山果て遠蛙

竹林の風の入口西王母

白白と明けて囀広がりぬ

さいたま 霜多光代

さいたま 飯田忠男

囀や森ふくらましては過る

されぎれのフルートの音春の宵

スコッチをロックでたのしむ春の宵

陽炎やゆき交ふ人の静かな目

満面に笑みをたたふる桃の花

山岸久美子

川崎 鈴木玲子

眺むるや月の夜桃花陶然と

花活けにふんぞりかへる桃の花

桐の木の影が伸びゆく遅日かな

遅き日のセピアの空に無事祈り

陽炎や一両電車軋み行く

田中泰子

和歌山 高橋満耶子

夏めくや舟の灯揺るる隅田川

草餅の色深きかなティータム

陽炎や水牛のそりと棚田鋤く

観音の胎内めぐる薄暑かな

洗面器に丸く寝る猫うららけし
うららかや腕廻しては骨鳴らす
今落ちし雲雀走りて草に消ゆ

花吹雪ベンチに仄と人の跡

墨引きの教科書思ふ入学期

ぜんまいもごごみも芽吹く古里に

大落し古利根川のうららけし

桃の花咲くも浪江は静かなり

サイクリングロード明るき桃畑

小さき蜘蛛「生れ変り」と独り言

厨より母の鼻歌水温む

筆談の愛の告白水温む

水温むレコード針のじりじりと

確かこのあたり今年も花水木

地面の記号不思議がる子と日永かな

經典より這ひだす梵字蝌蚪の群

蝌蚪群るる五線紙上の舞踏会

新入生の電車通学うひうひし

朝ざくら雲海と化す城下町

山桜ジグザグ降るる男坂

黄砂降る小説本を音読す

さいたま 高原和子

部屋干しの洗濯物や黄砂降る

青空が光集めて桃の花
桃の花挿して本日良き日なり
満開を称ふる夕日桃の花

さいたま 遠西勢津子

コロナ禍の東京遠し春愁

歌ひ手の東北弁や春愁

つつじ真つ赤呼び戻したき若き日よ

暮遅し煉瓦造りの工事人
時計見て夕餉の支度暮れかぬる

趣味違ふ老い行く妻ゐて春惜しむ

小浜 松島寛久

発心寺僧は青い目茶摘笠

宅配の弁当奢り雛の宴
職員の緊張走る春嵐

和田仁八郎

姫五人授かり竹の子天に延び

青葉潮櫓の音近し漁夫の墓

凧の糸切れて大空龍の行く

住む星の大荒れて花急かされり
つぼみ満つ小鉢の桜名舞台
辿りつくも休診の札春落葉

優勝のあとの朝寝よ大いばり

さいたま 川村 治

朝寝坊我には死語となりにけり

スニーカーの片方もつれ風光る

学帽の光る徽章や風光る

制服も窮屈になり卒業す

囀と光の揺らぎ遊歩道
囀は森の奥より四方より
沁み入るや名水の地の囀
ためらはず春泥直進三輪車
春泥を次々避けて部活の子

東京 飯室夏江

訪ふたびの海のにほひの白いシャツ

所沢 関根千恵

軋ませて甘き旅する籐寝椅子

弟の兎虫犬あづかる夜

水音をほどきて髪に初蛩

潮風は白きハンカチ乾かしぬ

春眠にバス乗りこして旅無残
蜂に紐つけて後追ふむかし流
春うらら満員気にし筋トレス
満面に花の嵐や古希迎ふ
腕腫らす蜂一瞬の置きみやげ

さいたま 小川洋子

嘯や二度寝させじと山の朝
華華しき散り際探る残花かな

さいたま 小林京子

山際の宵の明星残花射す
雲間より上弦の月春の宵
飲み干して身が気がかりな蜆汁

裏庭の八重山吹も風にゆれ
早朝のたけのご掘りやくはの音
柿若葉たつたひとりの小学生
谷深きまんさくの花満開に
勝手口ふきを煮つむる匂して

鬼石 加藤ナヲ子

廢屋に陽を独り占め紫荊

綿貫ひさの

横浜 山岸弘子

猪目の葉早や枝先に紫荊

芽木の色暈して谷戸の小糠雨
寝たままの目葉ゆるせ春の昼
院内放送換気うながす花の雨

陽炎や詐欺かもしれぬ電話の子

花満てり桜若木の伸びしこと

陽炎に瞬き四つ葉探しけり
鐘の音や桜蕊ふる茶屋の縁

痛み止め呑んで行こ行こ春の風

五センチのヒール響かせ春シヨール

湯浅 和

熊谷 篠塚正行

女性誌のモデルの笑顔春爛漫

山の中一人遅れて蝶を撮る
公園で童と遊ぶ紋白蝶

マネキンの坊主頭に春シヨール

あぜ道の薺花見て田の準備
公園で吾子ら見守る春日傘

玄関のチャイム聞きをる朝寝かな
リビングに並ぶ全集花曇

コロナ禍でまばらな通り春日傘

小夜曲のマンドリンの音春深し

森下美智枝

さいたま 元田亮一

竹竿から跳んで来るやはつ蛙

残る花一瞬にして風の中
夕暮れて静かに落つる残花かな

ペンキ塗り終へ門よみがへる春の暮

帰り道桜も終はる夕べかな

皆足止むる屋敷の角の遅桜

金町に金町の人桜餅

テレビつけれど春眠おそひ見過ごせり

列島を隈無く覆ふ黄砂かな

色褪せし引出しの文花蘇枋
古傷の痛み和らぐ花蘇枋
漆喰の壁に寄り添ふ花蘇枋
陽炎へ向かひて走る海岸線
陽炎の中へ中へと迷ひ込む

さいたま 木村るみ子

シャッター街コロナ追討ち桜散る
花ぐもり盤の彼の愛好敵手
永き日やヨガのメンバー勢揃ひ
春惜しむ隣町さへ珍らしく
うららかや竿壳の声久に聞く

いすみ 平石睦子

花筏淀みの先の異空間
花吹雪ゆふべの喧騒どこへやら
ランドセルしよつてしりもち一年生
花も人も寄り集まりて咲きにけり
春ゆふべわけあり野菜店先に

東京 畑宮栄子

筑波より見晴らす大地麦青む
青麦や古民家カフェに人疎ら
母の日や母の遺せし蒸籠かな
母の日や息子がつぎしロゼワイン
母の日の子等の明るきオンライン

さいたま 森 和子

大朝寝起こす一声「起きなちやい」
墨汁の一筆書や春灯
強風下一夜で組まる花筏
句を捻り歳時記を繰る春の宵
山吹の散るせせらぎの化粧映え

さいたま 鈴木藻好

春泥をそろりと久の里帰り
囀や無風に近き昼下り
アスファルトに春泥連れて出勤す
峠越え春泥深くからみつく
囀や悔し涙のさかあがり

緒方みき子

のだけしや双子の寢息ベビーカー
小さき手に砂の湿り気春うらら
日うららパンチパーマの大仏さん
揚げひばり黒一点を見失ひ
青き空仰け反りて追ふ揚ひばり

東京 柳父はる

立ち話何時まで続く春の暮
蜜蜂の空中散歩草原よ
春宵の漫ろ歩きや月満つる
初恋の校庭隅の遅桜
川沿ひの桜並木を一万歩

さいたま 野村美子

吉野山花のうねりや裾野より
青空に天女の舞ひや花吹雪
少年の口笛軽し桜道
まな板も狭しと跳ねる桜鯛
横綱に目の下三寸桜鯛

和歌山 嶋田洋子

目的地地図をスマホで春の昼
富士のぞむ安国論寺のどかなり
猫の子の目元口元さくら色
北の方見やる癖あり春の山
ワンピース何故だか嬉し春日傘

さいたま 鳴海順子

桜咲き友情堅き古戦場
古き鉢の光喜ぶ蝌蚪の群
花吹雪亀十匹の甲羅干し
花筏まつすぐ生くる難しさ
桜満開若き区長の誉め上手

南條きわゑ

鳥の巣の風雨に耐へる強さかな
水温むマラソンランナー好タイム
鳥の巣や餌せがむひな大騒ぎ
せせらぎを聞きてふくらむ猫柳
春暁や空ほんのりと紫に

後記朝香

復活祭聖なる赤の卵かな
肩ぐるま残花へ伸ばす小さき手よ
カメラ越し揺るる残花の夕間暮れ
残る花仕事帰りの遊歩道
風光る幼児に問ふや幾つかを

さいたま 橋爪さなえ

夕闇に桃の花咲く無人駅
満開の花桃おか紅く晴れやかに
暮れ遅し時間を忘れ庭仕事
おしやべりの刻忘れさす遅日かな
遅き日や頬にふれくる風やさし

川口 田村福美

散り際を思ひ巡らす残り花
待合せ小走る裾に春の泥
翅軟し風に流るる初蝶や
つくしんぼ野原の中のカツバドギア
棚霞大きな山を真つ二つ

奥山粉雪

空青く円き桜よ古墳群
龍神の尾天に突く花吹雪
燕はや八の字に飛ぶ勇姿かな
杖たより燕飛び交ふ古街道
記念樹や嫁ぐ今日の日花吹雪

さいたま 福田育子

定年の息子と佇む花吹雪

藤 沢 小島喜代子

春を待つ狭庭はもぐらの通り道

卓上の盆栽桜花に命水

新居への招待状や風光る

青竹にちらし寿司盛るひな祭

春深き上海朝の太極拳

職場への往復の坂八重桜

行く春やわらべ仲良く登下校

蛙鳴く夜道仲間と連れ立ちて

宮 代 関谷多美子

蒲公英や渡米の裔のそこここに

日が射せば照る葉透ける葉穀雨かな

日の暮れに土を払ひて穀雨かな

夕べには生垣大きく穀雨なり

東 京 山中いちい

麗らかや来し方便り読み耽る

春愁や独り住まひの長き日よ

遠き見る白雲群がる桜として

松の花門扉に高み家の象徴

河原 叔子

蜷汁その一粒に命あり

夕映えの木立ちの中の残花かな

はらはらと庭を過りて散る残花

朝日射すしやりしやり洗ふ蜷かな

根の浅き草をひき抜く復活祭

土くれの花びら被り残花かな

石段に空半分の残花かな

花びらをいつしよに返す春の土

さいたま 石浜悦子

回廊に尉面のごと染卵

岬回みさきまわいに帆休む朝の復活祭

残照に染まる一片残花燃ゆ

誰が泣くや久能の山に呼子鳥

草 加 持永喜夫

あと少し歩こう葉の花畑まで

中学の制服姿四月かな

入学の制服写真おとなびし

少女らの笑ひのつどひ春休み

鬼 石 榊原聰子

陽炎や私ふはりと夢の中

紫荊いづれが幹か枝なるや

ケアハウス空を指さす花蘇枋

土筆摘みお稲荷様に親子連れ

さいたま 小駒さち子

貼り紙に閉店とあり紫荊

紫荊薺めき合つて花薔

残像のピッチャーマウンド朧かな

兄弟は泣いて笑つて桜餅

春日傘貴婦人のやう斜にさして

愛されし上司の訃報別れ霜

春日傘さして男の子の照れ笑ひ

春日傘ひとつピンクに広がる野

雲雀野のぼこんと落ちる牛の糞

あえかなる記憶のかげら桜貝

花曇目を見て嘘を聞いてをり

おぼろ気な兄の遠忌や蓬餅

旧婚の出雲詣りや蜆汁

香りつく餅つく枝や花会式

奥山の庵見下ろす残花かな

おいでませ門前よそふ紫荊

竹林に音静まれり春時雨

青饅や量を過せし今宵酒

曇天のさくらふるへて居りにけり

残る鴨頭かくして去り行きぬ

さいたま 樋口元美

北出久美子

森 美枝子

秋谷信一

山下ユリ子

大 阪 遠藤人美

さいたま 古池恵里子

藤間友二

横山礼子

川島夕峰

山川 順

法要へ角を曲がれば花御堂

知り合ひの増えて桜の新天地

沈丁花オセロの必勝角を指す

自転車を押してお喋り駅日永

君子蘭ひととせを愛で朱を咲かす

万華鏡春の佳き日の虜なる

刺し子刺す春の佳き日に青海波

子守唄歌ふ芽花野紬婆

武家屋敷睡蓮咲かず構堀

俳と詩のはざまに生きて水中花

陽炎や2ヘルツずれたバイオリン

二股の猫消え果つる陽炎へ

釣果ゼロそんな日もある紫荊

復活祭いたづらうさぎは孫に似て

イースターわからず人の集まりて

久々のけいこ差がでる花曇

残る花一本離れた散歩道

正午過ぎ散歩途中の残花かな

明るさを卵にうつす復活祭

作品評

山本鬼之介

のどけしや居眠る母の手にバナナ

渋谷きいち

まことに心あたたまる母の無防備な姿が詠まれている。作者のご母堂はかなりご高齢だがご健在で、食欲も旺盛と聞いていたので、この俳句の背景を素直に理解することができた。今ではバナナがごく大衆的な食べ物になっているが、俳句の母が子供であった時代は、庶民の口には滅多に入らない高貴な果実であり、そのイメージが、母の脳裏の片隅に残存しているのかも知れない。手から放すことなく食べ残りのバナナを確り握っている姿が微笑ましい。

春泥をつけて尼僧の白緒下駄

原田秀子

都市を離れた辺鄙な所でも道路の舗装が完備している時代においては、季語の春泥を実感する機会は少ないが、それだけに、都市の住宅街の表通りでも殆どが未舗装であった時代

が懐かしい。春泥はまさにその時代の一端を表すもので、人通りの少ない路地などでは、泥濘んだ春泥に靴やズボンの裾が汚されて困ったものだ。着物と草履の女性にとってはなお始末の悪いものだったと思う。

庵寺の庭に出た庵主の下駄か、それとも彼岸の経をあげに檀家を訪れた尼僧であろうか。尼僧の清楚な姿が白緒の下駄によって伝わってくるし、下駄の緒について泥が、尼僧を一層優美に映し出している。

かつて此処に「銀巴里」ありき花曇

染谷正信

一九五一年（昭和26年）に開店、一九九二（平成2年）まで銀座七丁目にあったシャンソン喫茶「銀巴里」に熱い思いを馳せた俳句である。平成二年十二月二十九日に多くのファンに惜しまれて閉店したが、美輪明宏・戸川昌子・金子由香利などのシャンソン歌手を輩出し、江戸川乱歩・三島由紀夫・川端康成・岡本太郎・遠藤周作などの著名人が通った店と聞いている。作者も若かった頃のファンの一人であったと思う。銀座を訪れた作者がその地に立ち、懐旧の思いをこの一句に籠めたのだと推察する。

銀巴里の跡地（銀座7-9-11）には、その後高級万年筆の老舗メーカーである「モンブランギンザビル」が建ち、ビルの右横の歩道に「銀巴里の碑」がある。

花水木門扉を閉ざす大使館 橋本京子

大使館は、特命全権大使が、駐在国において公務を執行する公館のことであり、国際法で不可侵権が認められているので、何となく近寄り難いイメージがある。大国の大使館は大大で建物も大きく、人の出入りも多いが、逆に国名に馴染みのない小国の大使館は、こぢんまりしてひっそりしており、どことなく秘密めいた雰囲気がある。掲句の大使館はまさに後者の例にびったりで、花水木の爽やかなイメージとは対照的な雰囲気を発散している。中七の「門扉を閉ざす」がその特徴を上手く捉えている。

小ブーケの中に堂々花なづな 鈴木和子

チャペルでの挙式が終わり、列席者が待ち受ける扉の外へ花婿花嫁が出てくる。両側の人々から割れんばかりの拍手が起こる。花嫁が後ろ向きになり、未婚の女性ゲストへ頭越しにブーケを投げる。いわゆるブーケトスの演出であるが、そのブーケの中に地味な薺の花が入っていたとしたら、幸運にもそのブーケをキャッチした女性は何を感じるだろう。ちなみに、薺の花言葉は、「あなたに私のすべてを捧げます」である。

花筏人情漸を生みし橋 曲淵徹雄

山本周五郎の小説の舞台となった地名や橋の名、そして、登場人物の名前を思い出させる俳句である。いま作者が立っているのは、東京下町のとある橋の上。川面に目を移すと、川岸の樹から散った桜の花びらが川面を埋めて花筏となり、ゆっくりと動いている。周五郎の小説に登場する江戸庶民の哀歓が、橋の下を流れて行く花筏に凝縮しているように思えたのかも知れない。

大手門くぐれば桜ぶぶきかな 横山君夫

皇居の大手門か、或いは、観光地にある城の大手門なのか。いま作者は、徳川将軍か大名の気分で大手門を潜っている。城には桜が付き物で、時代劇のテレビドラマなどで、殿様が家臣や奥女中を従えて花見の宴に興じている場面があり、掲句を読んでそれを連想した。今まさに、殿を迎えるように最高の花吹雪が作者に降り注いでいる。

初蝶の風鐸かすめ相輪へ 保坂翔太

大寺の境内に建つ五重塔が見えてくる。この年初めて遭遇した蝶に感動ひとしおで、蝶の行方を追っている作者である。春風に応えて美音を奏でる風鐸をすれすれに飛び行く蝶が、

優美な相輪に達する。さらに高みを目指す蝶を追う作者の真剣な眼差ではあるが、ついに蝶は陽光輝く空に溶けこんでしまった。仏教建造物である塔の部材の名称を用いて、蝶との時間を共有した俳句に、筆者もついつい同調してしまった。

春眠や校舎の窓の飛ぶカーテン

梅澤輝翠

寒くもなく暑くもなく、とにかく春は眠りを誘う季節である。陽光燦燦の窓から心地よい風が入り、教師の声が子守唄のように聞こえてきて、知らず知らず舟を漕いでいる。すると、突然の突風で煽られたカーテンが、窓際に座っている生徒の頭を叩きつけた。その生徒はびっくりして目が覚めた。本句には、作者の実体験ではないかと思うほど臨場感が溢れており、「飛ぶカーテン」の不思議な言葉に惹かれて、勝手な解釈を加えてしまった。

日の匂ひそつとたたみぬ春日傘

越田栄子

柄物の女性用の日傘は、暑さはそれほどなくても、差しているだけで心を浮き立たせるような効用があるのではなからうか。このムードづくりには、春日傘がぴったりだと思ふ。開くときの喜び、そして、閉じて畳むときの喜び。喜びの質は違うかも知れないが、この二つの喜びは連鎖しているように思える。太陽の香ばしい匂いに顔をほころばせる女人の姿

を映し出した巧みな俳句である。

夜桜や見上ぐる先に軍星

村杉清吉

咲き誇った夜桜を仰ぎ見ていたら、たまたま北斗七星が眼に入った、という句意であるが、作者の心はそれをきっかけに夜桜から軍星へ移り、そこから思いが発展してゆくのである。作者は軍星から何を得たのか興味が湧く。

遅刻の訳を考へてゐる朝寝かな

笹本啓子

いま起きなければ遅刻すると分かっているはずと起きられない春の朝、その内に度胸がすわり、遅刻の言い訳を考える段階へと進んで行く。使い古した言い訳は使えず、あれやこれやと思考する時間が楽しいのかも。「春眠暁を覚えず」が上手く表現されている。

鎌を背に母子の家路夕蛙

西幅公子

牧歌色の濃い俳句で、やや現実離れの感を拭えないが、それだけに現今の複雑な世情の一端にこういう景があつてほしいと願う俳句である。夫婦でなく母子というところに注目した。母と連れ立つ子は男か女か、二人の年齢は何歳くらいかなど、いろいろと疑問が出てくるが、子を中学か高校の女生徒に見立て、学校が休みの日に母を手伝って農作業をしたと

仮定すると、現代版でも話を通じると思う。二人の会話を弾ませる夕蛙の存在が実に佳い。

急坂や思ひ出多き春の山 塩野久子

或る山の登り口に立っている。いきなりの急坂で、今ではとても登れないが、嘗ては何回か登ったことがあり、その都度の想い出が蓄積された山。若葉を仰ぎ、百鳥の声を聴きながら、想い出の一つ一つを辿る楽しい時が過ぎてゆく。

一礼し鳥居をくぐる春日傘 新 曆文

鳥居は神社の参道入口にあつて神域を示す門であり、伊勢神宮や鹿島神宮の神明鳥居が基本で、他に幾つかの形式があると聞く。掲句に詠まれた人物は、春日傘と「一礼し」から推察して、礼儀正しい和服姿の中年から老年の女性かと思う。たまたまその場に居合わせた作者の心に爽やかな印象が残ったのだろう。

鯉はねて彩の崩れし花の池 神田治江

池を囲んでいる桜の樹。池に映っている樹上の花と、池の面に漂う花弁。無粋にも大鯉が跳ねて池の面をめちゃくちゃにしてしまった。独り静かに楽しんでた花見をぶち壊された人の心情が理解できる。

蒼穹に映ゆる辛夷の田圃道 反町 修

晴れ渡った青空に辛夷の花の白が調和して実によい眺めであろう。田植えは終わったのかこれからか。辛夷の花を引き立たせる広々とした田圃道がなかなか佳い。

センサーライト照らして過ぎぬ恋の猫 山崎郁子

住宅街でかなり普及しているセンサーライトであるが、その家の前を通り掛かった時、急に照射されるとびっくりする人並に恋猫までもがライトを反応させるのかと思うと実に滑稽である。面白い題材を見付けたと思う。

残る花仕事帰りの遊歩道 橋爪さなえ

朝夕遊歩道を歩いて通勤しているのだろうか。桜花を蕾の頃から散りつくすまで観察できることは実に幸せだと思う。

棚霞大きな山を真つ二つ 奥山粉雪

横に筋を引いたように棚引く霞である。名刀の切れ味を思わせるような「真つ二つ」の表現が豪快でよろしい。

夕闇に桃の花咲く無人駅 田村福美

暗い駅灯にほんのり見える桃の花。淋しい無人駅ではあるが、季節を告げる桃の花が、利用客の心を和ませている。

水琴窟

(水明集五月号鑑賞)

池田雅夫

全力で遊ぶ保育士良寛忌

遠藤人美

「良寛忌」は一月六日。江戸時代後期の禅僧良寛は諸国行脚の後、故郷越後の国上山の五合庵に居住し、書に親しみ、村童を友とした。全力で子供に接する保育士の姿が良寛に重なる。コロナ禍の中、最善を尽くし児と遊ぶ保育士に感謝。

老いてなほ踏ん張る紅梅天仰ぐ

小島喜代子

ゴツゴツと枝を張り、みごとに風情の梅古木。枝と同様にその根を張るといふ。老木のむきだした根にも力強さを感じられる。「老いてなほ」と切り出したのは、あたかも自分を見ているように思えたのだ。下五を「青天井」としたい。

墨の香をのせて賀状の友の筆

水野興二

近年の若者は年賀状を書かなくなってきた。しかしながら、年賀状の風習をやめられないのが昭和世代。年に一度の便りで生息を確かめ合っている。毛筆の賀状の文字そのものにも友の性格、心持ちが表われている。友らしいと感嘆。

どんよりと空も泣きをり浅き春

山岸久美子

暦の上では春を迎えたものの、寒さがまだ残っている。曇った日や雨の日は寒の戻りと思われる日もある。そんな空の様子を「どんよりと空も泣きをり」と言い表わしている。

オオカミの餓ゑの遠吠え冬満月

阿部幸代

「オオカミ」の片仮名表記は季重なりを意識してか。狼と満月で思い当たるのが狼男のこと。満月を見た男が狼男に变身するという話。寒さ厳しい冬の満月の一切妥協しない凜凜しさにも、餓えた狼を包み込む慈悲が窺える。

貴婦人なる木の芽ふくらむ奥日光

外村紀子

奥日光の小田代原の「貴婦人」。広い湿原の中に立つ一本の白樺の木である。その優美な姿を称えて言う。標高の高い奥日光も春を迎え木々の芽吹き季節がやってきた。草も木も生気に溢れた活力を感じ取っているのだ。

紅梅のルビー散らして空真青

清水桂子

紅梅の中でも「未開紅」は八重で花が大きく蕾のうちから濃く紅い。ルビーは紅玉とも言われ濃紅色の宝石で人気が高い。そのルビーに紅梅をたとえている。「空真青」と蒼天を對比させたところがよい。びっしりと咲く梅の景が浮かぶ。

おがくづの寝床まどろむ春の馬 鈴木玲子

「春の馬」というと、牧へ跳びだしさつそうと駈けだす馬の姿が浮かぶ。野原を存分に走り回った夜、新たに敷かれた「おがくづ」の寝床に気持ちよく横たわり、うとうとしていくのだろう。馬といえども春眠を感じるのだろうか。

大げさに独活の齒応へ褒める夫 緒方みき子

市中で売られている独活の多くは栽培されたもの。日光を遮るように育てたもので、軟らかくあくが少ない。一方、山独活といわれる自然の独活は強い香りと固さもある。齒応えを褒めるということは、おそらく自然の山独活であろう。

春浅し遠山並は靄の中 田村福美

春といっても、まだまだ春らしさが感じられないころ。空には薄い雲がかかり、かといって降るわけでもない。いつも見馴れている遠くの山並がかすんで見えない。「靄の中」の語には春そのものが靄の中であると言っているようだ。

浅春や東の空に星きらり 遠西勢津子

東の空に輝く星としては明の明星がある。いわゆる金星のこと。明星は夜明け前のわずかな時間にしか見ることができない。早春の朝の張りつめた空気に星が一段と美しい。

ささくれの指にクリーム春浅し 橋爪さなえ

寒が明けたものの、まだまだ寒い日がつづく。水仕事などで指先にささくれができてしまった。やむを得ずハンドクリームを塗ったのだ。日常の生活感あふれる句に共感する。靴とは異なり、「春浅し」に少しの光明を見た気がする。

群青の海と対峙す野水仙 奥山粉雪

冬の寒さに堪えて咲く水仙は香気が強く気品がある。伊豆半島、越前岬など海岸の群落に心惹かれる。海の濃い青色と野水仙のやわらかな白が対比的に詠まれていて、水仙の芯の強さが一層強調される。吹き上げる風に水仙の香が漂う。

山笑ふ何やら鳥のせはしなく 川島まり子

臥遊録の『春山淡冶(たんや)にして笑ふが如く…』からとられた季題である。四季それぞれの山を美化したもので、より親しみが湧く。「山笑ふ」という擬人化に滑稽さも加わり、微妙な春の移り変わりを鳥たちも敏感に感じている。

猫柳銀色の衣まとひけり 増田静司

川のはとりや沼など水辺に自生する猫柳。早春に葉より先に銀ねず色の花穂をつける。まるで猫の尻尾のようである。思ったこと感じたことを素直に詠むことが俳句の基礎となる。

網野月を選

山紫集

行く春や桜の切手貼り終はる

野田静香

行く春や娘は料理に精を出し

鈴木和子

行く春やお色直しの道祖神

梅澤輝翠

春終る理由わけはひとつと限らない

青木鶴城

行く春や鬼教官の異動あり

鈴木玲子

羊水に溺れるやうな春終る

杉浦理恵

行く春や畑の隅のわすれもの

菅原卓郎

——以上特選

行く春や巖打つ波の静かにて

宇田白鷺

春行くや蔓の絡みし三輪車

高橋満耶子

弁天の春の名残の白き肌

曲淵徹雄

行く春の名残愛しむや五線譜に

田中章嘉

春行けり車窓の海の反射光

湯浅和

疫病蔓延行く春偲ぶゆとりなく

寺内洋子

逝春や仏間に届く陽は尽きて

高島寛治

川音を連れて春行く三方五湖

鳥羽和風

着る予定なくなり春の形見とす

川島典虎

行く春やポストに落つる文の音

飛永鼓

行く春や形見のカメラ棚の隅	外村 紀子	行く春や芭蕉の道を北上す	保坂 翔太
行く春や高尾山頂富士淡く	仲田 利子	行く春や空より高く観覧車	正木 萬蝶
行く春や会へぬ人とのもどかしさ	南條きわゑ	日毎減る夫への書簡暮の春	町野 広子
行く春や友と名残の学び舎よ	西幅 公子	春行くや花殻になる句の残滓	松井由紀子
行く春や三味線の糸切れしまま	野口 和子	行く春や小体 <small>こぶ</small> な店に向く酔歩	丸山 マスミ
行く春や秋田の兄へ定期便	野平美紗子	行く春へ贈るバンダナ草木染	宮崎チアキ
行く春や夫のメールを消せなくて	野村 美子	行く春や反射光りの瀬戸の海	森川 義子
例幣使街道の杉春終る	橋本 京子	行く春や小さき離島を縦走す	森下美智枝
佐保姫の後姿を見送りぬ	原田 秀子	行く春や庭に錆びたる小鳥籠	森本 早苗
行く春や未だ還らぬ人のゐて	日高道を	行く春や秩父札所の仏たち	山田美佐尾
お気に入りの服に虫穴春終る	福田 千春	行く春や長く水脈を引く練習船	横山 君夫
寄席を出て春の名残の街をゆく	藤澤 喜久	行く春や壁に風水カレンダー	新 曆文

行く春や薩摩陶里にけぶる雨	阿部幸代	行く春やバーボンロックにミント挿し	内田恵子
逝く春に買ひしシャツ振るへの字かな	安倍弘夫	銀座「ルパン」の止り木今も春逝けり	梅澤佐江
行く春や屋形船に灯が点る	新井孝磨	行く春のあの子の目差切なさう	小倉倭子
行春や養蜂箱が忽と消ゆ	荒井俱子	行く春や兄の納骨恋し里	大塚茂子
骨太の父の足跡春の行く	池田雅夫	行く春をランプの宿に惜しみけり	大場順子
行く春やAmazonの箱大・中・小	石田慶子	行く春や聖火ランナー見え隠れ	葛城千世子
行く春や良きも悪しきも押し並べて	井関礼子	行く春や瀬の笹小舟沈みゆく	加藤でん治
行く春や五百羅漢の薄埃	井上燈女	行く春やまた一人減るクラス会	川崎道子
行く春や松韻わたる須磨の旅	井上玲子	行く春や辻褃合せテレワーク	河原叔子
行く春やピンクのシューズ駆け抜けけり	井口俊晴	行く春や窓のはなやぎ暮れゆけり	神田治江
弔問を控へ弔電春行けり	石川理恵	行く春や「おしん」遺して発ち給ふ	熊倉千重子
春の別れ送会ならず退職す	上戸千津子	行く春やヴィヴァルディを聴きながら	河野はるみ

行く春や星溪園に水湧きぬ

越田栄子

行く春や旧師を送る宵の宴

染谷正信

行く春や波のとがりて重ね打つ

後藤綾子

行く春の夕陽見送る涙かな

佐々木典子

逝く春やパンデミックは鬼遊び

近藤徹平

行く春に己が体の佇みし

武田重子

行く春や野辺に草花を摘む少女

斎藤みよ

行く春や母と歩いて来たる道

千坂平通

行く春や姉妹に会へぬ日々長し

笹本啓子

行く春やワクチン接種待つ静寂

山岸弘子

行く春の通ふ碁会所カフェとなり

渋谷きいち

行く春や二分早めの掛時計

下川光子

行く春やバズルのピース欠いたまま

菅原真理

コロナ禍に人は巣籠春逝きぬ

鈴木藻好

☆

☆

行く春やトテ馬車通る陸奥の旅

諏訪サヨ子

行春や山並青き転任地

関谷多美子

混浴と聞きしが足湯行く春ぞ

瀬戸雄二郎

山紫集作品評

網野月を

ように「……て」「……して」のように受け止めないで、いわゆる「流す」ということもある。その場合は内容的に充実していることが必要となる。静かな波に洗われる、眼前の巖の存在感が秀抜なのである。

弁天の春の名残の白き肌 曲淵徹雄

内容的には「行く春や弁財天の白き肌」なのでしよう。しかしながら、この作者は「弁天の……白き肌」を季語「行く春」に取り合わせようとしたのではないのである。この季期には「弁天」は「白き肌」をしている、と詠んでいるのだ。一年中白い肌をしている弁天に行く春に取り合わせて、弁天の白き肌が最も際立つ、と詠んでいるのではないということである。むしろその「白き肌」には春の名残が宿っていることまで詠み込んでいる。叙景から一歩踏み込んだ表現に到っている。

春行けり車窓の海の反射光 湯浅 和

座五の「反射光」から季感はむしろ、「夏近し」「初夏」なのであるが、作者は光の微妙な移ろいに「春行けり」を斡旋した。時間帯もあろうし、作者の心の在り方もまたそこには反映している。ということとは上五の季語「春行けり」から緋いて、この「車」は何処から来たのか？ もしくは行く先は何処なのか？ を想像したり、晩春の海の穏やかさに慰められている作者の心持を想像したりすると、自ずと句に奥行きが増すようである。

行く春や畑の隅のわすれもの 菅原卓郎

中七にあるように「畑の隅の」という情報から「わすれもの」を類推するのである。季期からすれば、春耕の後かも知れず、古くは鋤か鋤かであろうが、現代的にはスコップを使用する家庭菜園もあるようだ。「わすれもの」ではなくて片してあったのかも知れない。

ともかく「わすれもの」として読者に想像させるところに味わいがある。座五の余韻とまでは行かないが、上五の季語と切れ字「行く春や」で十分に情趣を引き出しているので、中七座五は叙述の工夫に徹している方が、潔くて格好いいうだ。

行く春や巖打つ波の静かにて 宇田白鷺

上五の「……や」切れに対しては普通、中七座五でしっかりと受け止めるものである。体言止め、もしくは終止形でも良いだろう。流派によっては連用形にして上五に戻るという技法を推奨する向きもあるが、筆者は奨めない。稀に掲句の

逝春や仏間に届く陽は尽きて 高島寛治

手練れの句作りである。波郷や信子にもこの「逝く」を使用した作例がある。特に仏教的な事柄と絡めての内容の句が多いようだ。また冬日の低さ故に奥の仏間まで届く日差しが回季とともに引いてゆく様を「尽きて」と表現するところは、経験の豊かさを感じる。ただ「陽」は「日」の方が無難なように愚考した。内容の充溢した句であるので、簡潔な「日」の方が好ましいし、第一、空にあるものではなく、家の中を照らしている光の方であるからだ。

着る予定なくなり春の形見とす 川島典虎

「春の形見」が「行く春」の傍題である。本意は、春そのものが「形見」として残っていることを示しているが、掲句はモノが「形見」になつてゐるようにも読み取れるところがあり、その部分が捻りでもあるようだ。それでも成功しているのは、着物とは一言も言っていない点にある。「着る予定なくなり」は行為であり、事柄なのである。それだけに「形見」という言い方が本来モノであり、具象を見せているようにも思えてくるのである。

行く春や桜の切手貼り終はる 野田静香

少々、理屈なのであるが、日常性の中にこそ「行く春」を描写する力があるようだ。中七座五は行為である。筆者などはついつい切手を買い過ぎてしまい、季節感を逸して使えな

くなつて困ることが多いのだが、作者はそこをきちんと押さえられているのである。

行く春や娘は料理に精を出し 鈴木和子

上五の季語と中七座五の句意は、微妙な関係性を有している。「娘」とあるので、先ずは年恰好に思い至るのである。そして、これから人生の夏を迎える「娘」が何故に精出するのであるのか？と考えたりする。季語は動かない。

行く春やお色直しの道祖神 梅澤輝翠

奇特な方がご近所に居られるのでしようね。寺院の門前の六地藏などもお揃いの前掛けをしていたりするのを見かけます。季節ごとに新しいものに着付け直して貰って、道祖神もちよびり気恥ずかしい感じである。叙景の典型のような句の構成である。

春終る理由はひとつと限らない 青木鶴城

「春終る」は「晩春」の傍題としていて、「行く春」には類さない歳時記もあるでしょうか？本題と傍題の関係性の命題は常に作句上、存在する問題である。とにかく「春終る」としたのは、作者が「行く春」の叙情性を廃したかったのだからと愚考します。勿論、中七座五にその理由がある。しかもその理由にはプラスとマイナスの理由が混在していて、綱引きをしているのである。座五の「……ない」の否定形が存在感を示している。

大村節代 選

鼓
笛
集

寄宿舎の煎餅布団風薫る
五月雨や空を見上げる我慢の子
卯波来る水神様の供へ物

千坂平道

隣人と顔合はせずに夏に入る
突然の息子の来訪今朝の夏
心の奥推測するや夏の蝶

南條きわゑ

髪あぐる女まばゆし初夏の肌
山門を仰げば御堂夏木立
崩れ落つ牡丹の夢や地に還へり

神田治江

師逝きて庭一面の四葩かな
時なるかな紫陽花愛でて師は逝きし
紫陽花や茶毘の煙は真つ直ぐに

梅澤輝翠

蝌蚪生まれ地塘ひろぐる尾瀬の空
青鷺の一瞬の漁伸びる首
あめんぼの恋は激しく弾けをり

西幅公子

臯月波沖行く船を揺さぶれり
岬に立つ白き灯台卯月波
ネクタイを薄手に替へて夏きざす

村杉清吉

夕風を心地良くして夏はじめ
アイリスの紫を愛づ昼の月
鉢植ゑの紫陽花ブルーいとほしや

鈴木和子

横綱の幟旗なき五月場所
五月雨鳥居をくぐる寡婦の傘
若葉風淑女微睡むカフェテラス

新 曆文

風さやか指に残る香新茶摘む
齋王の牛車の列や初夏の賀茂
抱かれ地藏花降る椎の懐に

外村紀子

青葉下男四人の飲酒会
鉄線の囲む荒地やげんげ群れ
竹落葉句集残して逝きし友

湯浅 和

夏至祭の火に放り込めコロナ菌
時の日や二分遅れの掛時計
ホーホケキョ老鶯とはまた失礼な

寺内洋子

木木渡る風のやさしさ夏初め
初夏や少しお洒落をしてみたき
母の日や特上天井求めたる

高原和子

涼み船沈む夕陽に声上る
二時間に一度の換気若葉風
入口に土手築きたる蟻巢穴

水落守伊

小銭手に駄菓子屋で買ふラムネかな
財布手に花束選ぶ母の日よ
隅田川花の舞台の舟下り

武田重子

ざるをがせ靈気しんしん禪の寺
水芭蕉吊り橋揺るる秘境かな
蠟燭と手花火揃へ児を待てり

諏訪サヨ子

薫風やポッケに忍ばす万歩計
歩数入力スマホ片手に薫風散歩
薫風や気儘に散策髪白し

河原叔子

口笛のこころ浮かるる清和かな
太鼓音の色添ふ初夏の隅田川
気は心お裾分けする新茶かな

安倍弘夫

☆ ☆

下駄履いてカラコロコロと夏来たる
花冷えや親子の絆改めて
短夜や逢瀬たまさか火がついて

佐藤克之

鼓笛集作品評

大村 節 代

寄宿舎の煎餅布団風薫る

千坂平道

何となつかしい景であろう。寄宿舎とは、会社や商店、学校などが設けた共同宿舎であり、寝食を共に生活する。起床から就床まで面倒を見る先輩、話を傾聴する後輩、煎餅布団の思いつきと共に、絆は一生続く場合もあるという。

近頃の若者は、束縛を嫌うので、寄宿舎は廃れ気味らしいが、時には、先輩の小言、いや助言も必要と思うが。

隣人と顔合はせずに夏に入る

南條きわゑ

緊急事態宣言とやらで、外出もままならない昨今をよく表現されている。友人と食事に行くのはあきらめていても、以前は、折にふれて立話をした隣人にも会えない。皆が家に引き籠って息をひそめて、コロナの終息を待つ。あと何年元気でいられるのだろうか等と、考えている内に、早や夏になったが、まだコロナは終わらない。

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）

染谷正信

畔道をじんじんばしよりののこづち

私の母方の祖父は、明治十年生まれで百歳まで生き人だった。家は隣村で、わが家に来る時は、じんじんばしよりに地下足袋姿で、田圃道をすたこらと来た。幼い時に見たその姿を今でも鮮明に覚えている。この句は、達者で百歳まで生きた祖父への讃歌である。

髪あぐる女まばゆし初夏の肌

神田治江

夏になると、長く伸ばした髪が、うっとうしく感じて、髪をアップに纏める。その首すじの白さに、そこはかとなない色気を感じはつとする。下語の「初夏の肌」では、上五、中七と付き過ぎる。「初夏の風」とか「初夏の町」にしたら如何か。

句集喝采

近藤徹平

◆伊藤昌子「透明なエレベーター」

文學の森

著者略歴 昭和二十九年三重県生。平成五年「好日」入会。俳人協会会員。平成十九年第一句集『七竈』刊。現代俳句協会会員。

高橋健文「好日」主宰は、帯に「著者は俳句を詠む時は喜びも悲しみも人恋しさも、俳句という十七音に託す。独特の感性から生まれる詩的世界が更なる広がりを見せる」と記す。

月明の野に透明なエレベーター

行く秋の回転ドアから出られない

子燕の親を食らはんばかりなり

人影を風がほいでゆく花野

句帳だけあれば枯野にある居場所

成層圏突入のごと生まれ春

水族館出て春宵へ泳ぎだす

俳句は作者の手を離れば、解釈は読者に委ねられる。仮想の世界でも、読者の共感を得られれば成り立つ。第一句は表題句だが、透明なエレベーターが幻想的で楽しい。第二句、回転ドアが秋に未練を残す客を離さない。第三句、子燕は親の渡す餌を親ごと食わんばかり。第四句、風が人影を花野一杯に広げる。第五句、句帳があれば枯野も楽しい。第六句、孫達の誕生は宇宙から無事帰還した気分。第七句、水族館を出たら魚になった気分。筆者は著者の詩的世界の虜になった。

◆佐怒賀由美子「仔猫跳ねて」

本阿弥書店

著者略歴 昭和三十六年東京都生。同五十七年大学内の俳句会に入会。松本旭に師事。「橘」入会。「本当の顔」等三句集既刊。令和三年埼玉県立高校国語科教諭定年退職。

仔猫跳ねて転げて跳ねて並んで行く

月今宵手負ひの猫に水飲ます

凍つる夜のミケ前脚を揃へて逝く

肩に居るインコの目方春兆す

金魚飼ふふはふは生きるふりをして

「橘」は平成二十七年松本直初代主宰逝去に伴い、著者の在学当時の句友で現在の夫君佐怒賀直美氏が継承した。巻頭に夫君の「仔猫跳ね午後二人の日溜りに 直美」が揚げられ夫婦愛が滲み出る。句集三六六句のうち四七句は野良猫も含め猫を詠む。第一句は表題句で季語以外は動詞を五つ並べて挑戦した句。第二句は飼猫への愛が溢れる。第三句はその死を悼む。第四句、第五句も著者がペットを慈しむ句である。処暑の夜のコトリと母の指輪置く

常に明日はあるとばかりに栗の花

「あとがき」に亡き母堂が還暦の時に「これからが私の時代」、容姿が偏重された年頃は過ぎ才能が評価される世を迎えた喜びを披露する。著者も今還暦を迎え新たな出発を前に日々の思いを臆することなく句に詠む決意を新たにしている。

沖を視る人

山本鬼之介

いつもの道のいつもの人に春の雪

沖は霾天様になるひと梶芽衣子

板前の指のリズムよ桜鯛

囀に和する産声里の朝

基地のゲートを逃水突破その奥へ

昭和46年に「水明」、同48年に「面」入会。水明賞、季音賞、かな女賞受賞。平成26年「水明」副主席。同30年11月「水明」五代目主宰に就任。

師から教わったこと

三橋敏雄俳句に惚れ込み、「面」の諸兄姉に尻を叩かれ、兄・山本紫黄から「言葉」の大切さを学んで俳句に邁進して来たが、「水明」の主宰を継いだ今、果たせなかつた初代かな女への師事が叶った思いで過ごす日々である。

水明例会

第一例会（浦和）

茂和子
延昭報

生き上手の叔母の笑窪や聖五月
少女等の髪に草の香五月来ぬ
青年の歩巾五月を一直線
横町をとんと抜け出る五月かな
吹き抜ける五月の空へトランポリン
聖五月森の奥から円舞曲
五月来る少女の敬語まだ半ば

マスミ
大場順子
和葉
由紀子
治子
節代
延昭
以上特選
治子
延昭
理恵
稀香
はるみ
和葉
チアキ

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映報

五月来る気疲れの母ゆるみたる
行く春を刻んで送る砂時計
五月の風は青春の色いざ生きまむ
奥入瀬に水韻き合ふ五月かな
五月来ぬことさら透ける鳥の声

節代
由紀子
大場順子
マスミ
和子

本所てふわが東京よ若葉風
天神の餅は三角薄暑光
銀杏並木の空を若葉のVカット
母の日や孫も娘も我も母
退院を訊ぬる朝や窓若葉
若葉風五臓六腑に及びたる
麦の秋神社横切る猫白し
神の手や若葉の底より仰ぎ見む
決断に猶予与ふる若葉雨
鎮もれる献体慰霊塔椎若葉
金銀の椿の若葉天下晴れ

竺仙
昌弘
峰雄
禮子
鶴城
玲子
敏江
いちい
陽子
みどり
絹映
以上特選
寿恵
敏江
峰雄
いちい
鶴城
玲子

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

風音を聞かんと背伸び松の芯
若葉風土手の銀輪煌めけり
里若葉朝夕一度パスの行く
我の背を追ひ越す吾子や若葉風
囀りはSONGと訳す樟若葉
若葉風むかし神童いま凡人

竺仙
昌弘
禮子
陽子
みどり
絹映

菖蒲湯の寄り来る菖蒲顎で押す
しやうぶ湯や歩きはじめし吾子の傷
菖蒲湯や水と油のあにおとと
暮れさらぬ窓を打つ風菖蒲風呂
遠ざかる一片の雲楠若葉
影おとす沼さ緑に夏木立
旅愁また足湯に揺らぐ菖蒲の香

康世
萬蝶
徹雄
昇
以上特選
岡野順子
大場順子
康世
理恵
雅夫
喜久
萬蝶
祥絵
徹雄
昇

第四例会 (浦和)

境 延昭 石井喜恵 報

魚ひそむごと眠りけり若葉寒
柿若葉瓶立ちあぐる陶工房
谷若葉むかしのままの丸木橋
楠若葉「楠亭」のフルコース
勤行の声よく通る寺若葉
名城の矢狭間を綴る若葉風
新しきピアノが来る日若葉風
里の家の土間の湿り気柏餅

由紀子
翔太
延昭
光子
昇
寛治
喜恵
以上特選
玲子

柏餅さげて曾孫に会ひにゆく
旅情また足湯に貰ふ柏餅
紅茶うまし身に染むばかり窓若葉
武蔵野の湖上を走る若葉風
二つ目を分け合ふ夫婦柏餅
今さらに嫡男などと柏餅
新らしき柱の傷や柏餅
蒸しあがるまで外遊び柏餅
大きくなる少年の耳柏餅
歌垣の筑波の嶺や樟若葉
この先は落人部落里若葉
柿若葉朝日に映ゆるエメラルド
若葉風鳩は首から歩き出す
柏餅子の言ひ分も一理ある

順子
翔太
治郎
延昭
曆文
由紀子
恵子
でん治
マスマ
修
寛治
喜恵

第五例会 (浦和)

梅澤佐江 河野はるみ 報

ふるさとのためく船旗夏めけり
夏めくや骨董店を出る裸婦像
夏めくや漆光の薨波
夏めくや娘肩出し臍も出す
三社祭荷風通ひし喫茶店
夏めくや飛び出す絵本より翼

水尾
義子
理恵
はるみ
佐江
以上特選
美佐尾
はるみ
義子
理恵
水尾

夏めきて「マガジン雑誌」百万部
うなじ射す陽の恨めしや夏きざす
威勢よき小町むすめや三社祭
夏きざす酔客寝込む駅ベンチ
浅草の夜景包んで三社祭
奉納の舞つややかに三社祭
三社祭ソイヤソイヤの大増嶋

石田慶子 正木萬蝶 報
月を
マスマ
ひろこ
慶子
萬蝶
以上特選

若松句会 (京橋)

遠州や新茶と言はれ信じ込む
右すれば国分寺跡麦の秋
新茶の香呼ばれ慣れたる「お義母様」
原節子・笠智衆るて昭和の日
走り茶や糸底あらき夫婦碗

石田慶子 正木萬蝶 報
月を
マスマ
ひろこ
慶子
萬蝶
以上特選

関西例会 (大阪)

森本早苗 報

月おぼる茶漬の飯を崩しつづ
指の節氣にして母の汲む新茶
人恋ふる心にも似て新茶愛づ
新茶手に別れを惜しむ老いし母
二番ではだれなのですか新茶汲む
新茶汲む「六十五度」で母の声
新茶買ふ一年分を駿府來
校庭に一年坊主つばめ來る
鬼か蛇かゆるりと新茶供されて
「新茶入荷」の墨痕あざやか海鼠壁
やうかんを少し厚めに新茶汲む
師を訪ふも豈図らんや土茶のもてなし
新茶汲み茶柱胸に秘するかな
走り茶や我が保護色のうすみどり

月を
千春
佐江
儀勝
鶴城
はるみ
理恵
俊晴
ひろこ
マスマ
慶子
知子
倭子
萬蝶

夏つばめ遠く見送る羽田便

青葉潮盈つわたつみの大鳥居

変り映え無きこそ良けれ夏立てり

コロナ禍に振り回されてはや立夏

大淀の逆波がくれ残り鴨

隧道に出口入口風薫る

母の日も「母親業」は開店中

熊野路の奥へ奥へと夏来る

試食品ぴりぴり辛し夏に入る

宇宙より無事に着水春の夜

川の面に写る木々にも夏来る

南風呑んで羽ばたけ城の鯉幟

産土の神馬いなく青嵐

早苗

玲子

礼子

千津子

敦子

ゆら女

洋子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

和子

道子

昔話あれこれ

悲劇のヒーロ倭建命

(後編その1)

草薙の剣と袋

倭建命は、西国の熊曾建・出雲建を征伐して意気揚々と都に帰還した。

景行天皇は、休息を与えることもなく

「東方の十二カ国の荒々しい神々や朝廷

に服従しない者どもを撃ち平定せよ」と

命令し、御鉏友耳建日子を副将として付

け、柘の八尋矛を授けた。

宮廷を退出した倭建命は、伊勢神宮に

参拝した後、叔母の倭比売命に

「天帝は、私など死んでしまえとお思

いなのでしようか。西方から戻って幾ば

くもないのに、軍勢も下さらず、東方の

十二カ国を平定せよと仰せなのですよ」

と泣いて訴えた。

倭比売命は、草薙の剣と袋を与え、

「何か火急のことがあるまでこの袋を

開けてはなりません」と言つて送り出し

た。

尾張の国での約束

倭建命は尾張の国に入った。その夜、尾張の国の造の祖先・美夜受比売と結婚

しようとする約束して東国に向つた。

行く先々で、山や河の服従しない荒ぶ

る神々を服従させ平定した。

燃えさかる野原より生還

こうして相模国に着いた時、その国の

造が倭建命に、「この野原の中に大きな

沼があり、その神は大変乱暴な神でござ

います」と嘘をついて命を誘い出した。

命は、その神を見てやろうと野原に入っ

た。すると国の造はその野原に火を付け

た。欺されたと気づいた命は、叔母様か

ら戴いた袋を開けてみた。するとその中

に火打ち石が入っていた。先ず刀で草を

なぎ払い、火打ち石で向い火を付けて火

を退け無事に脱出した。

命は、国造の一族を斬り滅ぼし、焼き

払った。それ故、その地を焼遣という。

(つづく) (丸山マズミ)

各地句会



和歌山水明句会 (和歌山)

枝わたる栗鼠と目が合ふ子供の日
 満願の杖ををさめて夕薄暮
 ドライプの窓いつばいに青葉風
 ワクチンの痛みいろいろ夏の色
 今朝の夏似顔絵笑ふ番付表
 五月雨や鯉もどこかへ隠れたか
 対岸へまたぎて千の鯉幟
 蔑切や手づくり筏いざ進水

あゆみの会 (浦和)

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廻代

山遊 和子 重子 朋子 圭子 藻好

山茶花 (浦和)

大息を吐き畳まるる鯉幟
 隣家からの越境筍採りす
 土付きの竹の子荷台に友来たる
 竹の子を息子と食す晩ごはん
 母と掘るたけのこ料理酢味噌和へ
 百を超す鯉のぼりおよび横瀬川
 鯉のぼり子の声聞こゆ大使館

桜林句会 (大宮)

雲の峰たちまち沖に仁王立ち
 遠景の村落包む雲の峰
 雲の峰ボール一つを皆で追ふ
 鎖場を登り両神雲の峰

雛の会 (浦和)

桐の花富士を遠見の停留所
 期待せし代代男の子桐の花
 薫風や木洩れ日つづく遊歩道
 音軽やかに薫風の花鉢

芙蓉句会 (浦和)

卒寿こえひと日大事に柏餅
 母の日も朝一錠の降圧剤
 鈴蘭を植ゑ替へ雨の降るを待つ

マスミ 泰子 光子 清一 美江子 綾子

知子 光代 光子 美佐尾

喜恵 輝翠 チアキ 佐江

正子 道子 税子

白雲に幟映える日柏餅
 珈琲に柏餅添へ今朝の経

櫻蔭句会 (浦和)

藁を敷き父と育てし母かな
 青鷺や飛び立つ空のたかきかな
 青鷺の一瞬の漁伸びる首
 青鷺やまた田を棄つる老農夫
 ひと粒の苺に笑ふいやいや期
 迷子放送の空に青鷺飛んでをり
 青鷺やゆるりゆるりの足運び
 青鷺や終の住処となりし町
 夫十年の丹精ここに苺盛る

水明小川句会 (小川)

永らへて今年も見たぞ大牡丹
 莢豌豆かくれ上手を採り残し
 青葉道機町詠し牧水碑
 山青葉人の途絶えし古道行く

きざきサークル (浦和)

花桐の落ちて地上は点描画
 桐の花隣の姫は器量好し
 エール来る十三階の鯉のぼり
 茅花流しコロナぶとりで接種待つ
 待ち望み新芽に和む百日紅
 花桐の淡さかほりやあねいもと

美仁子

道子 千恵子 公子 茂子 由紀子 美智枝

多美子 幸代

みや 綾子 きよ子 栄子

俱子 啓子 喜代子 夕イ 和枝子

水明熊谷句会 (熊谷)

遠雷の火を消しにゆく消防車
消し込みの竿のしなりや風薫る
夏めくやホルンの響く上高地
老婆の飼ひしめだかをねらふ猫
耀うて小川の目高賑やかし
真つ新たなベッドシートや夏さざす
夏兆さす田水の光る千枚田
大甕の目高を覗く往診医

蘭の会 (浦和)

潮干狩尻濡れしまま帰宅かな
潮干狩空と交はるところまで
忘れ霜だての薄着のやせ我慢
人気なき庭の草むら忘れ霜
新緑の野にかけ回る風のリボン
九体寺の馬酔木のまふ別れ霜
潮干狩貝より蟹を追ひかける
汐干籠穴場探しに明け暮れて
貝のよに口をつぐみて潮干狩

円卓の会 (浦和)

親子連れゼル天空の田植かな
五時間目校長室に白日傘
爆音は貨車のブレーキ薄暑の夜

治江 栄平 徹行 和子 秀子 燈子 茂子 京子 和代 文子 トエ子 悦子 信一 孝男 月を 鶴城 静香 輝翠 翔太

畝立ての鉄の重さや梅雨の空
夕立来土の臭ひの生温さ
蜥蜴の尾けつして卑怯な奴じやない
薫風や気と気の揃ふ太極拳
芽吹句会 (浦和)

純白に慣れし嬰兒や聖五月
薫風に袖ふくらませ観覧車
齒科医院出て薫風のやさしさよ
色白に寝化粧映ゆる薄暑かな
薫風や部員募集の野点席
薫風の午後紅茶を夫婦して
鉄人の店組板の初鱈

俳句の手ほどき (山石榎)

新樹光窓が一つの丸太小屋
ふたつの影ひとつに重ね夜の新樹
ピアフ聴きワインの香る新樹の夜
開け放つ音楽室や新樹光
点描絵のパワー全開新樹光
百段の磴にひろがる新樹光
新樹かな舟漕ぐやうに研師の手
鞠のごと弾む少女や新樹光
終点の終バスの柵カーネーション
水田に映る新樹を股のぞき
那須岳の新樹の中の彼は誰

道を 修 月を 鶴城 ひろこ 玲子 千重子 千重子 富子 道を 延昭 倭子 佐江 ます美 慶子 水尾 美佐尾 義子 徹平 翔太 忠男

空も田も広がりてゆく新樹光
新樹光ゆつたり廻る遊歩道
サングラスすかして過る交叉点
能面に見つめられる新樹の夜
ミモザの会 (横浜)

とんでとんでがねのごとき飛魚の翅
にんにくと手裏剣の子ら飛魚食ふ
飛魚の目指すは金のメダルかな
屋久島の飛魚キラリ空泳ぐ
飛魚の来世は鳥になりたいの
花水木案内してゐる無人駅
飛魚や飛べ翔ベイスタンプールへと
飛魚の真直に青き飛行隊
あご飛ぶやかつて流刑の隠岐の鳥

クローン・シテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

追ひかくる夢は宇宙よ春満月
一筋の「さきょう」の軌跡春の月
春の月仲見世に買ふ館こ玉
手水舎の柄杓の光夏さざす
初夏の朝部活の子等の腕捲り
春の月ジャングルジムの檻の中
黄亀の眼とろりと藤日和
初夏の昼風だけ渡る交差点
先達の法螺の音高し夏隣

幸代 美子 卓郎 かつ子 史代 慶子 亜弥子 栄子 知子 由美子 萬蝶 玲子 千春 延昭 美枝子 正信 千恵子 淑子 俊晴 俱子 早都子 昇

若 鮎 句 会 (浦和)

母の日や感謝を文に認める
風薫る水性ペンの青き文字
をとり鮎動かぬ君を突いてみる
風薫る二番ホームの待ち合はせ
夕杜の子等の歓声風薫る
高鳴るや激流に挑む鮎の顔
風薫る紙飛行機の描きし弧
選ばれて囿の鮎となる不運
散歩道風の薫りて顔ゆるむ
沢のぼりわき出る水に風薫る
陰干のまぶし数多や鮎の里
上り鮎喧嘩つ早さは親譲り

蝸 蚪 の 会 (浦和)

幸代 亮一 芳春 みえこ 順 喜夫 さなえ 稀香 香音子 夕峰 月を 鶴城

朝香 朝香 礼子 さち子 信一 宣子 ひさの 元美 鶴城 月を

野 ば ら の 会 (浦和)
卯の花や谷に捨てたき思ひあり
星川の水面に揺るる姫うつぎ
自宅にて世界遺産の鳥ビール
うの花や五弁の白さ掌に移す
卯の花や手帳に父の闘病記
卯の花や会話の弾む垣根ごし
泡の髭おどけて和むビアガーデン

若 狭 水 明 会 (若狭)

初花 和風 白鷺 冬至 保人 鼓 郁子 寛久 ことは 祥子 想子 久美子 のり子

青葉潮サーファー胸を熱くして
葉桜の作りし蔭や人想ふ
葉桜の濃き影を踏み散歩道
沖をゆく白壁の船や青葉潮
川下る舟葉桜の岸につく
葉桜や優しさ力強さへと
青葉潮タンカーゆるり沖合を
葉桜や衿を正して能楽堂
魚住む沈没船や青葉潮

り そ な 俳 句 会 (浦和)

福美 小麦 勢津子 義子 鶴城 真知子 水尾 静香 曆文 建治郎 雅夫 道治 寛治 久美子 京子 マスミ 道通 平通 京子 清吉 鶴城

卯波立つ夜明け間近ぞ龍馬像
伽羅露や黒光りして佃島
卯波跳ね沖の岩影見え隠れ
帆掛け船卯波けたてて出航す
大漁旗卯波被りて帰港せり
卯波立つ眼下離島の滑走路
露湯がく灰汁の強さは母の勝ち
お通しは露の土佐煮よ地酒酌む

新 樹 の 会 (浦和)

夏めきて富士の裾野の膨れけり
蚕豆や三尺伸びて堂々と
夏めくや水高増せる代用水
蚕豆や切子のグラス並べ置く
夏めくやポニーテールの女学生
水やりの葉つば活き活き夏ささず

皇月の会 (浦和)

無観客の呼出しむなし五月場所
豆飯の炊ける匂ひを嗅ぐ家路
豆飯や記憶の中に母が居り
豆飯を朝風混ぜてよそひをり
七夜にて散りし牡丹のいさぎよき
雅なる社の屋根と著我の花
杖二人ばつくり寺の牡丹かな
初夏の風歴史散歩の列が行く

青葉の会 (浦和)

夏霞女城主の城跡に
鉄線花粹な女の胸のうち
カフェテラスより広がる海を夏霞
頂上の山小屋隠す夏霞
寺の庭真つ盛りなり鉄線花
朝練の声行く土手や夏霞
収穫後いもづる見ゆる麦の秋
表札が取りはづされて鉄線花
卯波立つ沖を遠見に網を干す
りんどう俳句会 (浦和)
夏草に手を泳がせて河畔まで
スカートの小膝眩しき薄暑かな
約束の駅へ小走る夕薄暑

珪子 順子 紀子 静香 孝磨 久子 曆文 さいち

夏草や早瀬を跳ぬる銀の鱒
夏草の匂ひ好きだと深呼吸吸
夏草を刈れど伏兵逼りわり
銀輪の列なる山路薄暑光
新暖の風のくすぐる触れ太鼓
湯上りのアロマの微香夕薄暑
みくじ売る巫女の手白き薄暑かな
夏草や古墳談義に盛り上がり
沼薄暑朽ちかけてゐる丸太杭
あぶらとり潜め薄暑の京の旅

紀子 典子 卓郎 正信 弘夫 サヨ子 寛治 利子 徹雄 順子

ベランダからはみだしてゐる鯉のぼり月を
安達太良の空が恋しと鯉のぼり
武者人形飾り無口な父が居る
双方の爺婆来たる初節句
俺の名の一字を孫に鯉のぼり
リビングの武者人形は祖父のもの
武家の出と自慢の婚家武者飾り
幾つになつてもずっと母の子どもの日萬
ジェンダレスの時代を泳げ鯉轍
父となり初めてあぐる鯉のぼり
園庭に大きな目目の鯉のぼり

喜久 史代 広子 知子 由美子 千春 萬蝶 理恵 美千子 玲子

櫛の会 (浦和)

麦の秋はづす琥珀のペンダント
山峡の汽笛こだます麦の秋
麦の秋野に置き去りの六地藏
老いてなほ妻の健啖麦の秋
麦の秋北の大地の臍に立つ
麦秋や新築二軒売出し中
麦の秋聖火ランナー手を振りて
膏葉の衿より覗く麦の秋
さやくさやくと雨蛙鳴き雨来たる
将棋盤かこむ四五人雨蛙
鶴川山百合句会 (町田)
鯉轍不要不急の風受けて
泳げど泳げど釈迦の手の内鯉のぼり

千重子 裕之 克之 裕之 朋志 富子 文子 富美子 彰二 治子 廉三 雄二郎

光が丘俳句教室 (東京)
茶処に拘る御仁新茶くむ
年を経て七音の味古茶が好き
木洩れ日も風も若葉や香も若葉
その下に秘密をうづめ柿若葉
花衣の会 (浦和)
新緑や間歇泉は天を衝き
似ていない似顔絵展や麦の秋
麦秋や狐の嫁入り通り抜け
鯉つり男料理の腕自慢
黒潮の香り背負ひて初鯉
青麦や将棋倒しに靡きけり

はる 史子 竜也 理恵 京子 みよ 京子 みち 峯雄 章嘉

神戸大池句会（神戸）

夏兆す神戸パンダに不整脈
紀州より子の釣り来たる大鯰
音色よき草笛真似て音鳴らず
少年の靴音はづむ新樹光

水明大阪俳句会（守口）

一滴を汲み分け友と新茶かな
コロナ禍の憂さを晴らしに蕨採り
首夏の夜や淀に織り成す万華鏡
長男の嫁の忍忍花櫛
傘ふれて散る花藤の盛りすぐ
乳飲み子が風つかみある春の昼

柿の木塾（浦和）

夏めくや厨の水の荒使ひ
白鷺は白き妖精雨に映ゆ
夏めくや歩廊に弾む旅靴
夏めくや派手と知りつつ旅衣
赤ん坊大の字に寝て夏めくや
夏めくやひらひら風の抜ける服
白鷺は大きく傾ぎまはれ右
肌触りの畳恋しと夏めく日
夏めけりそれぞれ違ふ木木の色

珊瑚の会（浦和）

百年の家青梅の落つるまま
青梅の雫もろとも挽ぎにけり
青梅や箆目美しき比丘尼御所
裏木戸を開けて天竜川築簀かな
上り築かけ坂東太郎悠悠と
築打つや逸る手足を宥めつつ
青梅や軒に鎮座の陶狸
築に跳ぬる魚に子等の燥ぎやう
激つ瀬に蛇籠を組んで築組んで
瀬の音や闇を流して夜の築
梅落とす和尚口だけ指図だけ

水明松本句会（松本）

吹かれ来る子等の喚声青嵐
つつじ咲き老いの心に燃えるかな
雨続き出せたの二日さ鯉のぼり
ネモフィラのニッコリ顔の花開く
夕焼の空は朱色にたをやかに

☆ ☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
- [作品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
- [送付先] 網野月を 電話 048-862-5926
〒336-0025 さいたま市南区文蔵1-13-3-401

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

2021年 7月号

特集 虚子と兜太

- 虚子と兜太それぞれの道 筑紫磐井
- 虚子30句 田中亜美
- 兜太30句 岩岡中正
- 虚子・兜太の魅力 宮崎斗士 立村霜衣
- 一句鑑賞 虚子 伊藤政美 大石雄鬼
- 一句鑑賞 小林貴子
- 一句鑑賞 兜太 稲畑廣太郎 今井肖子
- 木暮陶句郎 阪西敦子

特別作品30句 安西篤

タラシエ 俳句界NOW 環 順子

酒句に酔う俳人と酒

- ◎酒を詠んだ名句30句 河内静魚
- 芭蕉…高柳克弘 其角…復本一郎
- 万太郎…寺島ただし 素十…稲田眸子
- 波郷…大石悦子 五千石…水内慶太
- 真砂女…鳥居真里子 裕明…山口昭男
- ◎酒場に集う俳人たち 伊藤伊那男

私の一冊 植田 密 「生志花」

対談 新高谷 学 (週刊文春 編集局長)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名! 日本一充実の投稿欄

戦争を詠む ということ

特集 後世に残したい 戦争を詠んだ一句

- ◆巻頭三句 小澤 實
- 西村和子
- 蘭草慶子
- 衣川次郎
- 岡部榮一
- 米田規子
- ◆今月の華 日原 傳
- 津高里永子
- ◆その時 俳句手帳 仲村青彦
- ◆俳句と短歌の10作競詠 堀田季何
- 永田 紅
- ◆好評連載 藤枝リュウジ
- 575の散歩道 筑紫磐井
- 俳壇観測 坂口昌弘
- 忘れ得ぬ俳人と秀句 青木亮人
- 句の手触り、俳人の響き 大西朋
- 俳句へのまなざし 神作研一
- 手のひらの江戸 藤村公洋
- 古典籍を旅する 俳句のつまみ 二ノ宮一雄
- 一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2021年8月号

7月20日発売 定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

夏季競詠

(令和3年)

年一回、季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるつて御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼題 「夏野」 「夏野原」「青野」 など傍題可

「炎天」 「炎気」「炎天下」 など傍題可

「見」 (詠込み) ※夏の季語で詠む。

句数 両題通じて五句

締切 七月二十五日

投句用紙 今月号巻末に添付

季音の方は季音も投句して下さい。

水明夏行のご案内

- 【第1日】** 令和3年7月30日(金) 午後1時～5時
- 【会場】** 本所地域プラザ BIG SHIP 東京都墨田区本所1丁目13番4号
電話 03-6658-4601 FAX 03-6658-4613
- JR御徒町北口下車→東京都バス(錦糸町行き)
本所1丁目下車→バス停より1分で会場
 - 都営浅草線・大江戸線「蔵前」駅より徒歩8分。
 - 東京メトロ「浅草」駅より12分



- 【第2日】** 令和3年7月31日(土) 午後1時～5時
- 【会場】** JR浦和駅東口「浦和パルコ」9階
浦和コミュニティーセンター 第15集会所
- 【参加費】** 第1日～第2日を通じて2,000円
(1日参加の場合は1,000円)
- ※事前申し込みはいりません。当日直接会場へお出かけ下さい。

事業部

風 声

○俳句四季五月号——「季語を詠む」欄
銅像は馬と軍神樟茂る

鬼之介

○現代俳句五月号——「列島春秋——地区別現代俳句歳時記」欄
ハーブ鳴るやおどりでたる黒揚羽 大橋 旭代

○現代俳句五月号——「現代俳句の風」欄
お正月死語に写真機・蓄音機 菊池ひろこ
墨堤に団子二皿春惜しむ 染谷 正信

○天塚（宮谷昌代主宰）五月号——「珠玉一句」欄
浅春や祇園甲部の夕景色 鬼之介

○くちら（中尾公彦主宰）五月号——「受贈俳誌美術館」欄
陽炎の中へ融けゆく別れかな 鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）五月号——「受贈誌拝見」欄
一門の拍手そろふ建国日 鬼之介

○好日（高橋健文主宰）五月号——「受贈誌御礼」欄
小鉢に水菜わりない仲になる夕べ 鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）五月号——「受贈俳誌紹介」欄
浅春や祇園甲部の夕景色 鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）五月号——「現代俳句鑑賞」欄
州浜ゆき氏による山本主宰の二句を鑑賞 鬼之介

浅春や祇園甲部の夕景色 鬼之介

祇園甲部の芸妓が春の舞台稽古に励む浅春の夕暮れは三味線の音が路地に流れ灯に華やぐ光景が浮かぶ。

しかし昨年と今年は祇園祭や祇園甲部の踊りも中止になったと聞き、作者はかつての華やきを偲ばれたのであろうか。

板前の指のリズムよ桜魚 鬼之介

桜魚は小さいだけに板前の指の動きも繊細でリズムカル。あつという間にカラリと揚がった天ぶらで一献、春宵一刻千金の美味である。

○太陽（柴田南海子主宰）五月号——「一誌一耀」欄
二の堰へ向かふ水音春の闇 鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）五月号——「他誌拝見」欄
浅春や祇園甲部の夕景色 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）五月号——「諸家近詠」欄
板前の指のリズムよ桜魚 鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）五月号——「諸家近詠」欄
二の堰へ向かふ水音春の闇 鬼之介

○苧（山本一步主宰）五月号——「受贈誌の一句」欄
天狼の青悠久の彼方より 原田 秀子
冬星の今も犇めく故郷かな 横山 君夫

○爽樹（河瀬俊彦主宰）五月号——「俳誌管見」欄
須藤國雄氏の鑑賞

さやけしや打首めいてにじり口 青木 鶴城

「さやけし」は秋の大きが澄み切った様をいうらしい。その対比が「打首めいてにじり口」と表現して、奇抜で面白い。にじり口は茶室特有の小さな出入り口で、少し暗い。出てくるとき、白い顔がにゅっと先に出る、その様子を打首めいてと表現したのでしよう。（日高道を抄出）

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和三年五月三十一日現在 —

上戸千津子	20	口	西山貴美子	10	口
伊藤敦子	6	口	下川光子	5	口
梅澤佐江	30	口	仲田利子	3	口
宮崎チアキ	2	口	保坂翔太	5	口
山本鬼之介	50	口	西浦千枝子	10	口
町野広子	3	口	葛城千世子	10	口
丸山マスマ	5	口	南條さわゑ	5	口
山岸久美子	2	口	十倉和子	10	口
辻 静子	5	口	川崎道子	10	口
関根千恵	5	口	大橋廸代	10	口
由良ゆら女	20	口	嶋田洋子	3	口
田中 章嘉	5	口	高橋満耶子	5	口
匿名	10	口	島津初花	5	口

水落守伊	6	口	松山清子	5	口
田寺玲子	10	口	瀬戸雄二郎	10	口
石川理恵	10	口	永野史代	10	口
持永喜夫	4	口			
			— 合計 309 口 —		

誤植訂正

六月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○一五頁下段

正 鎮花祭 栢尾さく子

誤 鎮花祭 栢尾さく子

○三九頁下段

正 さいたま 川村 浩

誤 さいたま 川村 浩

○六五頁上段左より六行目

正 著者

誤 筆者

後記

新型コロナウイルスの予防接種が軌道に乗って、水明会員も第一

回の予防接種を終え、二回目も終えた方もいらつしやると思います。

水明全国大会も今年は、予定の日時で行える事でしょう。初めて

パルコで開催の全国大会は、担当の道をさん、鶴城さんが、頑張っ

て一番広い部屋を予約して下さいました。ところがコロナによる定

員削減の要請で、入場者は半分の六六名になってしまいました。そ

の結果、出席を希望される方をおことわりするという残念な事態

を招いてしまいました。しかし、今月の月末（七月三十日、三十一日）に開催予定の夏行は、本号

八五頁にご案内の通り、事前予約はいりません。ご出席希望の方は

お気をつけて、お出かけ下さい。本号の巻末に「夏季競詠」―山

紫集」の投句用紙が付いています。水明集の方は「夏季競詠」に投句して下さい。季音の方は、さらに季音（雪・月・花）への投句もお願いします。

「夏季競詠」とは、オール水明人が、年に一度、水明集、季音に關係なく、同じ季題で、真剣勝負、一発勝負をする場です。

夏季競詠が何時頃から始まったのか、古い方達も分らないというほど昔から続いている、水明の伝統行事です。新人がホップ・ステップ・ジャンプと躍り出て皆の称讃を浴びたり、ベテランがこんな

筈ではなかったと嘆いたり悲喜交々のある行事です。水明賞、季音賞の選考の折には、参考にご参加

されると言われます。挙つてご参加されます様お待ちしています。

家ごもりの日々にあきあきしてあります。オリンピックを行なつても、感染者は増えないのでしょうか。日常が戻りますよう祈るばかりです。

（節代）

今月のはてな？

海芋（かいう）：カラー（花のこと）

蝮蛇草（まむしぐさ）

穴太積（あのをづ）み

喫茶去（きつさこ）

松魚（しょうぎよ）

孵（かえ）す

朱華（はねす）

画眉鳥（がびちよう）

射干（ひおうぎ）

泥濘（ぬかる）む

7 頁 16 20 21 24 30 36 45 50 58

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）

時間：午後1時～午後5時
（火・木・土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。）

水明

令和三年七月号

通巻一〇九〇号

令和三年七月一日発行

発行人

山本 鬼之介

〒330-0073

さいたま市浦和区元町一丁目一七八

電話

048-886-1600三

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩訶四丁目二二

電話

048-822-474一

誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一一、〇〇〇円

同人費（誌代を含む）

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費（誌代を含む）

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇一〇一九三九三

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

亡き友の好きな信濃路花わさび
雨蛙鳴くや今宵は坊泊り
築打つや逸る手足を宥めつつ
葉桜へ衿を正して能楽堂
初蝶の纏れ離れて涅槃塚
夏草や秘湯へ迷ふけもの道
若狭嶺を映す水田を植ゑはじむ
真向ひに子午線の町卯波立つ
右すれば国分寺跡麦の秋
花桐の落ちて地上は点描画
菖蒲湯に武将の香氣あり熱し
五月闇蠢くものは皆怪し
白ゆりや感染症科ナース室
白藤の垂れて菩薩のかんばせを
お七夜の寝息に安堵新茶くむ
青鷺やまた田を棄つる老農夫
三社祭荷風通ひし喫茶店
原節子・笠智衆ゐる昭和の日

波多野寿子
星野和葉
茂木和子
矢作水尾
山中みどり
柚木治子
原田想子
森本早苗
丸山マシミ
荒井俱子
藤澤喜久
鳥羽和風
近徹徹平
井上玲子
正木萬蝶
大塚茂子
河野はるみ
石田慶子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

のどけしや居眠る母の手にバナナ
 春泥をつけて尼僧の白緒下駄
 かつて此処に「銀巴里」ありき花曇
 花水木門扉を閉ざす大使館
 小ブーケの中に堂々花なづな
 花筏 人情 嘶を 生みし 橋
 大手門くぐれば桜ふぶきかな
 初蝶の風鐸かすめ相輪へ
 春眠や校舎の窓の飛ぶカーテン
 日の匂ひそつとたたみぬ春日傘
 夜桜や見上ぐる先に軍星
 遅刻の訳を考へてゐる朝寝かな
 鎌を背に母子の家路夕蛙
 急坂や思ひ出多き春の山
 一礼し鳥居をくぐる春日傘
 鯉はねて彩の崩れし花の池
 蒼穹に映ゆる辛夷の田圃道
 センサーライト照らして過ぎぬ恋の猫

渋谷きいち
 原田秀子
 染谷正信
 橋本京子
 鈴木和子
 曲淵徹雄
 横山君夫
 保坂翔太
 梅澤輝翠
 越田栄子
 村杉清吉
 笹本啓子
 西幅公子
 塩野久子
 新 曆文
 神田 治江
 反町 郁修
 山崎 郁子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 昇雄 明淵 徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正 木 萬 蝶
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉代	森本 早苗